

一橋大学附属図書館 研究開発室年報

Annual Report of
The Hitotsubashi University Library
Research Development Office

第9号 2021年



国立大学法人

一橋大学
HITOTSUBASHI UNIVERSITY

一橋大学附属図書館研究開発室年報

第 9 号 2021 年

Annual Report of the Hitotsubashi University Library
Research Development Office. No. 9, 2021.

『一橋大学附属図書館研究開発室年報』第9号（2021年）

目 次

【特別寄稿】

田中克彦	わが夢の森 一橋大学図書館の回想	9-01-1
------	------------------	--------

【論文】

伴野文亮	一次史料から立ち上げる治河協力社の研究 —金原家文書「事務書類」を手がかりとして—	9-02-1
------	--	--------

【報告】

柴田育子・尾城友視	一橋大学附属図書館ディスカバリーサービス改修 事例報告	9-03-1
-----------	--------------------------------	--------

寺島久美子	学部カリキュラムにおける図書館ガイダンスのマ ッピング：ALPS履修証明プログラム成果報告	9-04-1
-------	--	--------

関連規則・規程		9-05-1
---------	--	--------

【特別寄稿】

わが夢の森 ―― 一橋大学図書館の回想

田中 克彦

一橋大学名誉教授

1. 注文の多い新入院生

ある大学の品位と見識を知るには、何よりもその図書館を見ればわかると、誰かが言い、私自身もまたそのようにずっと思ってきた。それは何よりも、その大学の専門領域とされる分野の図書が、専門を担ってきた教師たちの見識によって集積された成果であるのは当然であるだけでなく、また専門をはみ出した部分が、どのような関心によってカバーされているかを知ることができるからである。私のばあい、蒐集された核心の図書よりも、その周辺をなす部分により多くの関心がある。なぜなら、その周辺部こそ、研究者の論文だけではうかがえない、未来のより大きな発展の可能性を示していることがあるからである。

1958年に一橋大学大学院社会学研究科に入学したとき（この年度には阿部謹也がいた）、東京外語モンゴル語学科卒業という私の経歴を知る人は、一橋大学に入って何ができるんだといふかった。まず第一に、図書館にモンゴル関係の文献などあろうはずはないだろうと多くの人が考えたからにちがいない。しかし私には、これまでのモンゴル研究に一大変革を及ぼしてやるんだという、ひそかな野心があったのである。

その野心のキーワードは私がつくった「言語文化」だった。研究対象を言語だけに限るのではなく、言語の上に成り立った、言語を基底とする、それぞれの文化の特性を解明しようというものだった。それが、従来のような、こわばったモンゴル研究を解放するんだという意気込みがあったからである。

修士論文はこの動機から、「17世紀モンゴル年代記の相互関係」と決定して、そこからの歩みが動揺することはなかった。

たよりは2冊のモンゴル語テキストの研究書だった(1)。

シャスティーナ 17世紀のモンゴル年代記シャラトージ、モスクワ 1957

ジャムツァラノー 17世紀モンゴル年代記（ゲッティンゲン・アジア研究叢書3）

1955

私がシャスティーナの本に熱中したのは、はじめからその内容をよく知っていたからではない。レニングラードで出版されたこの本に使われたモンゴル語の活字がいまでは用いられなくなってしまったジャムツァラノの製作にかかわる活字に酷似した美しい形のものであり、そのロシア語の訳文もわかりやすく、これではじめて、モンゴル年代記というものの性格がわかったような気がしたからだ。

そこで私がつかんだのは、歴史書の記録（ヒストリオグラフィー）や文学史は、それまでの国家を単位に現れた作品を年代の軸に従って単に羅列したものでなく、歴史と文化の動態を写すかのように、言語的背景と有機的にからみあいながら展開していくものとして記述してみたいという観点だった。

たとえばモンゴルの言語作品であれば、チベット仏教史の伝統ときりはなせない。チベット仏教史はまたインドの仏教史と不可分の関係にある——というような背景がある。そこで東洋大学で知り合いの人がやっているチベット語の授業にも出かけるようになった。

そのころ聞いた話だが、ビザンツ史の専門家渡辺金一さんは、アテネフランセに通って、ギリシア語とラテン語を身につけられたという話だった。若かったからこういう苦勞に耐えられたのだが、私も東洋大学のほかに、自身でも Jäschke のチベット語文法の本を買って勉強してみた。そして、やっぱり仏教の原理のみならず、その周辺の説話などをぎっしり収めた「チベット大蔵経」がないとだめだと考えて、ちょうど鈴木大拙が中心になって、護国寺で編集されたという「チベット大蔵経」を全巻そろえて図書館に買ってもらったのである。私の大学院入試に際して面接をしたのは大田可夫、山田九朗のお二人だった。山田先生の大学院の授業はギヨーム・ド・ロリスのロマン・ド・ラ・ローズを読みながら、先生の構造主義的手法を用いた作品分析をうかがう授業だった。大田先生とは、たびたび研究室に立ち寄っては雑談しておじゃまをした。一橋にはこんな本すらない、どうしたんですか、と、まるで私を入学させた先生を責めるような口調で話したものだ。大田先生の授業には一度も出なかったが、私が不満をもらすたびに、だからあんたに入ってもらったんだよと言われ、はっとして襟を正したものである。総じて、先生たちは、私の話をよく聞いてくれた。

モンゴル年代記には末尾にドイツの文献学者たちが Kolophon と呼んでいる奥書の部分があって、作者はここで用いた資料はこれこれだと説明している。17 世紀モンゴル年代記の中に「蒙古源流」と日本では言いならわされている文献がある。日本ではじめての「蒙古源流」の翻訳を出されたのは、江実（ごう・みのる）さんだった。この訳本は、じつは満

洲語版から翻訳されたものである(2)。訳文は流麗そのもので、後に岡山大学で知りあいになった江先生その人からうかがったところでは、「私はこれを訳すのに上田秋成(1734-1809)の文体を学んで、それをすっかり身につけた上でとりかっただよ」とおっしゃった。

先生は東京大学と京都大学でそれぞれ言語学を専攻された方であるが、日本で言語学をやった人には、このような文学かぶれの人はいなくて、このように文体に凝る人はめったにいない。それだけで、私はこの人に心服してしまった。後、1974年に私は東京外語のモンゴル語専攻の講師になっていたのに、この人に折伏されて岡山大学に移ったのには、こうした背景もあったのである。

私は東京外語ではサンスクリットを含むさまざまな言語にふれて、研究者としては早いスタートを切ったと思う。「蒙古源流」のテキストとして世界に知られているのは、Isaac Jacob Schmidtが1829年にペテルブルクで独訳をつけて刊行した、いわゆるシュミット版であった(3)。

私が学生であった当時、著者サガンセツェンが用いたとコロフォンに掲げた資料は6つか7つか、読み方によって違いが生ずる点で議論があって、私は7つであるという意見に賛成した。そしてそれを当時、大学院生で出していた「一橋研究」に研究ノートとして投稿した(4)。「一橋研究」は、当時、ロシア音楽を研究テーマとしていた大塚明さんが企画し、デザインした、まことに瀟洒なすがたをした雑誌であった。私の研究ノート「17世紀モンゴル史書「シャラ・トージ」とその周辺」が掲載された第6号(1960)は冒頭を上原専禄「学問と現実」が飾り、松田芳郎「不完全競争と経済変動過程」、田島壮幸「応用化学としての経営経済学」などの論文と、さらに中村喜和「H.A.メシチェルスキイ『古代ロシア語訳におけるヨセフス・フラウィウスのユダヤ戦史』」がのっている。

私は研究ノートの抜き刷りをソ連科学アカデミーシベリア支部である、ブリヤートの研究所に送った。この研究所は当時「社会科学研究所」の名を帯びていたが、今日は「モンゴル学・仏教学・チベット学研究所」と改称されている。

なぜそうしたかは今ではわからない。以前からその研究所が出している紀要を買いそろえ、できることならブリヤート研究をやりたいと早くからころざしていたからであろう。

送った抜き刷りはむだにはならなかった。しばらくしてから、この研究所の紀要、第8号(1962)が送られてきて、そこには、私の研究ノートがくわしく紹介されていた(5)。たぶん当時のソ連の学会は、これをとおして、日本の研究状況の一端を知ることができたか

らであろう。たぶんこのブリヤートの研究所の紀要は当然モスクワでも読まれていたことと思う。こうしてモンゴル学者としての私の名はソ連邦で知られることになった。

ソ連邦大百科辞典第16巻（1974）のモンゴル研究の項には「日本ではモンゴル人民共和国の現代史研究に関心が生まれつつある」として私の名があがっている。執筆者はボイコーワとズラートキンである。ボイコーワさんには、その後モスクワの東洋学研究所に行くたびに何度も会うことになる。ソビエト大百科の紹介では、ぼくの専門は文献学だの歴史学だのではなくて、「現代史」となっているところから見ると、シャラトージの研究ノートによって知られたのではないとわかる。

いずれにせよ、1974年は私が40歳のときである。ソビエト大百科は日本の誰でも読む本ではなかったから、日本ではほとんど知られない記事であつたろうが、私はソ連に出かけるときには、このコピーをいつでもポケットにしのばせて行くことにした。たびたび生じた警察とのトラブルが起きたときには、これを見せれば何かの効果があるだろうと思ったからである。別巻の人名索引には田中は2人しか出ておらず、もう一人は田中角栄氏だ。ソ連でよく知られているのは、アジア侵略計画を1927年に天皇に上奏したという田中義一の名である。ところがソビエト大百科には田中義一の名は出ていない。当時のソ連はすでに田中メモランドウムは偽書だと決めていたのかもしれない。捕まって名前を言えと言うから、田中だと言うと、じゃ、あんたはあの有名な上奏文を書いた田中の息子かと言うから、いや田中はロシア人のイワノフとか、ドイツ人のシュミットとか、どこにでもある名なんだと言うと、おまわりさんはがっかりする。こういう場合にこそ、そうだと強く肯定すれば、相手はきっと満足したに違いないとあとでわかった。

しかしこういうことがあった。たぶん1982年のことだ。モスクワのカザン駅から汽車に乗って、キルギス共和国に行った。首都が今のようにビシケクではなくて、フルンゼと言っていた頃だった。バザールで写真をとってホテルに帰ったら、警察から呼び出しが来ていた。ホテルの最も端の目立たぬ一室に簡単な裁判所のようなかまへの部屋が準備してあった。3通のロシア語による告発状を見せられた。茶色のリュックサックを背負った不審な外国人が軍事施設の写真を撮っていたというものだ。それだけではない。当局は、すでにモスクワのカザン駅から私のあとをつけていたらしい。カザン駅で私はすでに怪しい者だったのだ。取り調べの3人は大学の法学部かどこかを出ていて、こういう事件の実習をやっていたのであろうと私は想像した。身なりもよく、血色のいい若者だった。私は、かれらが急に私の学生であるような気がして親しみの心が湧いてきた。

そこで私のロシア語の力のおよぶかぎり、話がしたくなってきた。汚いカザン駅にいたから怪しいと言うんだね。ソビエト連邦成立 60 周年に私は招かれてやってきた。それはうそではなく本当だった。東京にもカザン駅に相当するような上野駅というところがある。私だったら上野駅を見ずして東京を語るなど言いたい。いったい君たちは社会主義を何と思っているんだい。カザン駅は私たちアジア人全体の誇りだよなどとしゃべり立てた。3 人の若い当局者は微笑しながら、静かに私の話を聞いていた。こっちが相手に好意を抱いてさえすれば相手もこっちを悪く思わないと言うことは経験から自信があった。かれらは理解したらしいが、今カメラに入っているフィルムだけは出してくれ、あとはいいからと言うので、それだけはすなおに従った。あとで聞いたところでは、日本から私と同行していたカメラマンはリュックに入れていた 60 本ほどのフィルムを全部没収されたと言っていた。

2. 三浦文庫にあった！ シュミット版「蒙古源流」

さて、話に大きな寄り道ができてしまったので、大急ぎで、本題にもどらなければならない。私の論文にとって、何よりも大切なのは、「蒙古源流」のシュミット版なので、ここにもどることにする。この文献は、東京外語の学生時代に、何度か図書館で開いて親しんでいたもので、何よりも東京外語の図書館に行ってみたところ、私の研究に最も近いところをやっておられる先生のところに貸し出されていることを知った。そこで、先生のお宅にうかがった。それは、玄関を入ってすぐのところに置かれていた書架の上段の中央にあるのがすぐに見えた。で、私は、シュミット本の第何ページだけでいいから、そこだけを見せてくださいと頼んだ。先生の答えは意外だった。「いまこれを使っているんだ、だめだよ。」いま、とくにあるページの一語だけ見ればいいのです。を見せてください。「ダメだ。いま使っているんだから」。私はそれ以上求めなかった。ぱっとそこを開いて見せるだけですむじゃないか。それができないのは、この人はぼくを恐れているんだと察知したからである。

この先生とは入学してからすぐに親しくなったが、その後 2 年くらい会わなかった。2 年の間に何が起きたか。この人はまず山によく登るようになった。そしてそこで知り合った女子学生と結婚した。昔は先生はぼくを連れてよく酒を飲ませた。ぼくが酔いつぶれるとご両親といっしょに住んでいる家に連れて行って、母上に布団を敷かせ、ぼくは先生と

体をくっつけるようにして2人で寝たこともある。それほど親密だったのだ。でも今は家族という新しい愛の対象ができたのだ。しかたないと思ったのである。

しかし何よりも、ぼくは先生から恐れられるライバルになったのだということを自覚したのである。この話を後に亀井孝先生に話したところ、田中はいい経験をしたんだ。そう、文献を扱う人間は汚いもんだよ。たとえば同じ版本（先生のおっしゃるのは木版本のこと）が古本屋で見つかり、ふところから巻き尺を出してきて計り、私がこれを論文にして出すまでは、絶対にこの本は人に見せないでくださいと頼んでいく人がいるんだよ。そんな頼みを律義に守る古本屋がいた時代の話である。で、この話をある人にしたところ、その人は、それはまだいいほうだよ、二冊とも買って、一冊は焼き捨てたという人の話を聞いたよということだった。私はこの話を聞いて、なおさら文献学には近づかないようにしよう。文献学は才能のないだけでなく、汚れた心の持ち主にまかせておこう。ぼくは本なんか知らない、理論家になるんだと心に決めたのである。このことはもっと書きたいが、とめどなくなるから、ここでやめておこう。シュミット版の蒙古源流は東洋文庫とか東洋史のメッカである京都大学に行けば必ず見られるはずだからと引き下がったのである。

ここからがわが一橋大学附属図書館の話になる。一橋大学に蒙古源流のシュミット本なんかあるはずがないと、頭から決めてかかっていたのである。ところがあったのだ！

私は一橋大学に入学したときに、図書館のどなただったか、教官ではない事務部の方からメンガー、左右田、三浦文庫のカタログ数冊をいただいて大切に持っていた。私は何よりも、大学院に入った新入生をかくも重んじて遇してくれた図書館に深い敬意を抱いたのである。そこで窮したあげく、あらためてかねてから身辺にあったこれらのカタログを開いてみたのである。そうするとあった！ 三浦文庫にである。三浦新七には『東西文明史論争—国民性の研究—』（昭和25年 岩波書店）という大著がある方だから、モンゴルのオルドスにまで関心が及んでいても驚くにはあたらないとしても、求めていた本が、まるで私を待っていたかのようにきちんと出てきたのには感嘆したのである。きれいに製本してあったが、ページは切ってなかった。民国26年（1938）北京文殿閣影印版である。私は厳粛な気持ちになって、ページを切りながら、はじめての読者としてこの本に接した。

後に私を、ゼミナールの一員に加えていただいた増淵龍夫先生にその話をしたところ、三浦門下生の1人であられた先生は次のように話された。三浦さんは、毎月数種類の洋書の新刊カタログを学生に見せて、君たちに見たいと思った本があれば遠慮なく印をつけておいてくれ、それを注文しておくからと言うので、増田四郎さんたちと共に印をつけたの

だそうである。であるから三浦文庫はすべて新七先生の選択されたものとはかぎらないとしても、こうして学生をも加えて、幅広い蒐集が行われていたことになる。しかも三浦先生は、それをすべて自身の私費で購入されたということである。三浦文庫のおかげで、私の修士論文はできあがったことになり、さらに私をソ連の学界に知らしめたというその恩義の深いことはかぎらないが、ここでは、この蒙古源流をはじめてヨーロッパ語訳をつけて刊行したシュミットについて述べておこう。

シュミットは1779年にアムステルダムに生まれた。父は商人であったが、フランス軍の占領によって零落したために、1797年にオランダを脱出してロシアに来たということだ。そしてシュミットはボルガの下流に住むカルムイク人たちのもとで商売を行うことになり、カルムイク語を身につけたということである。1811年にモスクワに移り住んだが、ナポレオンのモスクワ侵攻によって翌年ペテルブルクに移り、ここで商売をやるかたわら、サンクト・ペテルブルク聖書協会の会計係をやるうち、協会の指示で聖書のモンゴル語とカルムイク語訳に従事した。

シュミットはさらにモンゴル語と文化の理解のためにはチベット語を知ることが不可欠であると知り、かれの研究領域はさらにチベット語にまで及ぶ。1831年からはじまった、かれの自著の出版活動はめざましいものであった。

1829 蒙古源流のテキストとドイツ語訳

1831 モンゴル語文法

1834 ゲセル・ハーン物語の独訳

1835 モンゴル語・ドイツ語・ロシア語辞典

1836 ゲセル・ハーン物語のモンゴル語テキスト

1839 チベット語文法

1844 チベット語・ロシア語辞典

この1835年刊行の「モ・ド・ロ辞典」は1950年代、まだ神田の古書店には見ることができて、私も1冊を買ったが、1954年頃、慶応大学で中国語を教えていた神谷衡平先生のお宅をたずねたところ、このシュミットの辞書をノートに筆写しておられたのを見た記憶がある。昔の先生たちはえらいなあと思った。中国語の先生でもモンゴル語をやっていた。しかもその説明はドイツ語とロシア語である。こんな人がいまの世にいるだろうか。私が生きてきた時代を回顧すると、学識は時代がすすむにつれて、退化する一方である。

シュミットのモンゴル語辞典は、後にポーランド人のコワレスキーが、カザンで「モンゴル・ロシア・フランス語」（1844－1849）の3巻本辞典を出すにいたって、シュミットの辞書は凌駕されているが、このまだ現れていないコワレフスキーの辞典に寄せたシュミットの推薦文には、まことに頭が下がる思いがするのである。モンゴル学というせまい領域では学者どうしが互いを悪く言い合い、足を引っ張りあったりするものであるが、シュミットはコワレスキーの将来に期待し、学識をほめたたえる、その高潔な姿に感激せざるをえない。

シュミットは1835年の刊行になるこの13000語を収録したモンゴル・ドイツ・ロシア語辞典の序文で、その9年後にカザンから、全3巻本となって刊行されるコワレフスキーの辞典について、次のように予告している。

したがってこの辞典は、未来にゆだねられるべく、より詳しい辞典にモンゴル語の語彙を蒐集し観察するための基礎となる、モンゴル語の学術的研究が私の死とともに終わるものではないという期待が持てるのは、若い二人の学者たちコワレフスキーとポポフが、熱心さとすばらしい成功をもってこの学問に献身し、学術的な教師としてカザン大学で、有望な研究グループを作っているからである。

と記せば、コワレフスキーは、その「モンゴル・ロシア・フランス語辞典」で、実際にロシアの土壤で、熱心なアカデミー会員、I.J.シュミット氏が文法と辞書の刊行によって、モンゴル語の研究の基礎を築いたことは、東洋学愛好者として、心からの感謝に価するものである(6)。

と述べている。

では、このコワレフスキーとはどんな人だったのだろうか。ポーランドのロシアからの独立をめざすグループに参加したとして逮捕され、カザン大学に送られて、モンゴル研究に従事した。そのときのカザン大学の学長は非ユークリッド幾何学の創始者として知られるニコライ・ロバチェフスキー（1792～1856年、学長在任1827～46年）であった。コワレフスキーの仲間の一人ショパンは一足先にパリに逃げた。ショパンのその後のことは多くの人が知るとおりである。

私はあるときロシア語で出たユダヤ人名辞典（サンドレル モスクワ、2004年）(7)を見ていて、シュミットの名が現れたから、ここではユダヤ人として扱われている。大いにあり得ることだが、たしかめてはいない。

私がシュミットを尊敬してやまないもう一つの理由がある。それは、かれが「蒙古源流」のテキストを研究しただけではなく、「英雄叙事詩」とされているゲセル・ハーン物語の翻訳を行い（1834）、そのテキストも刊行した（1836）ことである。このテキストは北京で木版で康熙 55（1716）年に刊行されたものであり、いわゆるモンゴル文語から見れば著しく口語形の露出した、文語としてははなはだしく規範にはずれた形で書かれている。シュミットはこのようなテキストに関心を抱き、積極的に挑戦したものと見える。後に 1927 年になって、ポッペは、このテキストの言語的特徴について、「ゲセリカ」と題し、独立の論文を書いたくらいである(8)。

シュミットがモンゴル語世界とかかわったきっかけは、文献学者ではなく商人としてである。活きたカルムイク語をまず話すことからはじめ、続いて書物の世界に入ったという経歴の人であって、古文書からはじめる、文献学者とは全く異なる経歴をもつ人であったからである。晩年は視力を失っていたと、サンデルは記している。

ロバチェフスキーであるが、かれがカザン大学に開いた東洋語研究は後のロシアの東洋学研究の基礎となったが、そのすべては後にレニングラードに移されることになる。カザン大学の人たちは、そのことをしきりに残念がり、口惜しがっている。

3. 三浦文庫にさらに見出された掘り出し物

私はこのところ、「ウラル・アルタイ語」についての本を書いている(9)が、そこでは、H.ウインクラーの本についてこう書いた。「何冊ものこのテーマについて書いた、この人の本は見たこともなければさわったこともない」と。しかし、さきに述べたシュミット本の例もあることだからと、念のためカタログでさがしてみたところ、三浦文庫にはウラル・アルタイ語についてのウインクラーの著作が3冊(10)も所蔵されていたのである。これは東西文化を幅広く見渡してやろうという、三浦さんの学風から言えば当然のことであるが、まことに感激の意外な発見で、心あたたまものである。私は三浦さんに報告したい。あなたの集められた本は、21 世紀に、一橋大学で言語学を学ぶ学徒にも、大きな励ましを与えられたのですよと。

4. メンガー文庫について

メンガー文庫、特にその *Reisen* の部門にはおもしろい本があるよと教えていただいたのは、長い間一橋大学で文化人類学を講じてこられた大林太良さんであった。まだ「社会科

学古典資料センター」という、古書の牢獄のようなものが設立されておらず、複雑な手続きをしなくても、かなり自由にメンガー文庫が見られた時代、私は大林さんの指示どおりメンガー文庫を何回か見た。それはロシア領となった中央アジアをはじめ各地を訪ねた P. S. Pallas の仏訳本である。それは、水彩の挿絵が何か所かに貼りつけてある本で、めずらしいものである。メンガーは何のためにこの本を読んだのだろうか。ラクダの積み荷を調べた部分などに鉛筆で書き込みがあったのをおぼえている。このように手のかかる本は、何百部も刷られるのではなく、せいぜい 300 部くらいだったろうと想像されるのである。

5. メンガー文庫の言語学書

最後にメンガー文庫が所蔵する Theodor Benfey の「言語学史」のことを述べておかなければならない。これはサンスクリト学者として、研究史の上でかならずその名をさけて通ることのできない人であるが、この人の言語学史は、いわゆる印欧語比較言語学が、音韻法則の発見に、いわば有頂天になって、この一派が Junggrammatiker（青年文法学派）の名を帯びる以前の状態を表している。

註

ここでは、本稿で言及した文献について、その原題を列記しておく。

- (1) Шастина, Н. П., Шара Туджи, Монгольская летопись XVII века, Москва-Ленинград 1957;
Žamcarano, Mongol Chronicles of the Seventeenth Century.
- (2) 江実『蒙古源流』弘文堂、東京 1940.
- (3) Schmidt, I.J., Geschichte der Ost-Mongolen und ihres Fürstenhauses, verfasst von Ssanang Ssetsen Chuntaidschi der Ordus. St. Petersburg 1829.
- (4) <https://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/hermes/ir/re/6785>
- (5) Г.Н. Румянцев, К.В. Сыденов, Японские исследования монгольских летописей. Материалы по истории и филологии Центральной Азии, Улан-Удэ 1962.
- (6) Ковалевский, О.М., Монгольско-Русско-Французский словарь, том первый, Казань 1844.
- (7) Сандлер, Б.М., Сандлер, И.Б., Евреи, Кто они? Москва 2004.
- (8) Poppe, N.N., Geserica. Untersuchung der sprachlichen Eigentümlichkeiten der mongolischen Version der Geser Khan, Asia Major III 1927.

(9) 『ことばは国家を超える—日本語、ウラル・アルタイ語、ツラン主義』ちくま新書、
2021.

(10) Winkler, H., Uralaltaische Völker und Sprachen, Berlin 1884.

——Das Uralaltaische und seine Gruppen, Berlin 1885.

——Der Uralaltaische Sprachstamm, das Finnische und das Japanische, Berlin 1909.

【論文】

一次史料から立ち上げる治河協力社の研究
—金原家文書「事務書類」を手がかりとして—

伴野 文亮

東北大学大学院文学研究科

1. はじめに

本稿は、一橋大学附属図書館が所蔵する金原家文書にある治河協力社関係資料の一つである「従明治十六年九月事務書類」（史料番号：KM22-19-18、以下「事務書類」と表記）を手がかりとして、近代浜松の実業家・金原明善¹（1832-1923年）が有志とともに1874年（明治7）に設立した治河協力社の「事務」の内実を考察するものである。

金原明善の天竜川治水事業と治河協力社については、明善が戦前から「偉人」として顕彰されてきたこともあって、既に多くの研究が積み重ねられている²。だが、それらの多くは概して、「偉人」としての明善の事績を顕彰する論調が強く、明善の取り組みを客観的に歴史化したものは少ない。そうしたなかであって、明善の取り組みを一次史料に基づいて実証的に歴史化したのは、新谷九郎であった。新谷は、当時土屋喬雄監修のもとに金原治山治水財団が進めていた明善の伝記編纂のなかで、本編にあたる『金原明善』³を著した。『金原明善』は、金原家と金原治山治水財団が所蔵していた膨大な数の一次史料を素材として明善の人物像と事業を叙述したもので、その時点での金原明善研究の到達点であった。同書のなかで新谷は、治河協力社の基礎的考察を行い、明善が「官からも、また地方公共団体からも、財政的にも、技術的にも独立して、独自の治水事業を遂行しうる団体を一日も早く確立しようとする目的をもって、社を運営していたといいうるのではないか」と述べて、明善の実践を評価した⁴。その後の金原明善と治河協力社についての研究は、この『金原明善』と、『金原明善』の刊行と併せて編纂された『金原明善資料』（上下）をもとに紡がれ⁵、今日では斎藤新⁶や渡辺尚志⁷による地域史の視座に基づく精緻な研究成果を得るに至っている。

だが、新谷以降の明善研究が依拠してきた『金原明善』および『金原明善資料』は、限られた紙幅で編纂された二次資料であり、特に資料集は後述するように所々史料を割愛して収録したものも少なくなく、今もって明善と治河協力社をめぐる歴史の全体像が描かれた

とは言えない。2016年に金原家文書が一橋大学附属図書館に所蔵されたことで、一次史料に基づく研究が可能になった今こそ、一次史料を用いた実証的研究が研究史の課題として指摘できると考える⁸。

そこで本稿は、具体的な一次史料を用いて治河協力社の歴史化を試みる。具体的には、一橋大学附属図書館が所蔵する金原家文書のなかにある「事務書類」を分析対象にして、同社の「事務」の内実を詳らかにしたい。本稿で詳らかになるように、改めて一次史料に即して治河協力社の実態を考察することで、治河協力社の新たな歴史像を垣間見ることができた。では、具体的にどの様な事実が明らかになったのか。その点については第3節以降で確認していくことにしよう。ひとまずは、そもそも金原家文書とはいかなる史料群なのか、そこにはどの様な史料が存在しているのかについて見ていきたい。

2. 金原家文書の性質と内容

本節では、今回の分析で扱う「事務書類」を含む金原家文書にはいかなる歴史資料があるのかについて簡単に紹介しておきたい⁹。

2021年3月現在、金原家文書は、目録件数で8902件を数えることを確認している。総点数については、仮目録を作成する過程で「書簡一括」として採録したものも多数あるためまだ確定できていないが、数万点に及ぶと推定される。年代をみると、近世前期から戦後にかけて幅広く残存しているが、多くは明治・大正期に作成されたものである。同文書の性格としては、①金原家伝来の歴史資料と、②金原治山治水財団が明善の伝記を編纂するために収集した歴史資料の二系統から構成されている。史料の内容についてみると、i) 明善個人や彼が展開した事業に関する史料、ii) 蔵書や年忌法要の記録といった金原家の歴史に関する史料、iii) 浜名耕地整理組合や躬行同志会など遠州地域の歴史に関する史料という、大きく分けて3種類の性格が指摘できる。同文書には、明善個人に関する史料から彼の家族もしくは「家」に関係する史料、さらには地域の歴史をうかがい知ることのできる史料が数多く遺されており、歴史学のみならず経済学や経営学など様々な分野の知見から学際的に活用されるべき史料群であるといえよう。

つぎに、本稿で扱う治河協力社に関する史料にはどのようなものがあるか、いくつか紹介しよう。

文書類では、1874年（明治7）に作成された「治河協力社規則」や1881年（明治14）

に職制を変更した際に作成された「治河協力社規則職制並章程」、1883年（明治16）1月4日から同年12月31日までの治河協力社の収入・支出金額が細かく記載された「出納簿」などがある。これらの多くは、1968年（昭和43）に金原治山治水財団が編纂し刊行した『金原明善資料』（上下巻）に収録されているが、簿冊類を中心として紙幅の都合上「抄録」という形式で収められたものも多く、史料の全体像が分からないため研究に使用することが難しかった。それが今回オリジナルな資料で発見されたことで、史料の全体像を押さえた上で研究に資することができるようになったのである。これらの他にも、1880年（明治13）から1886年（明治19）の間における治河協力社の土地集積のプロセスがわかる「地所売買録」や、宛名が「治河協力社社長 金原明善」とある借用金証書の数々など、同社の金融や資産に関する史料が多数確認されている。

また、上記のほか、明善が天竜川治水の担い手を育成するために創設した水利学校に関する史料も複数存在している。主なものとして、水利学校社費生¹⁰たちが治河協力社（もしくは明善個人）から金を借りる際に作成したと思しき借用金証書、すなわち借金証文がある。この史料からは、合計8名の社費生が治河協力社と明善、あるいは同校で教鞭を執っていた戸川深見¹¹から金を借りていた様子がうかがえる。もっとも多くの金を借りていたのは鈴木治三郎という人物で、借用金の合計は288円70銭であった（表1）。鈴木は、遠江国第十一大区五小区豊田郡前野村（現静岡県磐田市）の鈴木利作の長男で、1878年（明治11）2月25日に「治河協力社々費生徒ニ選挙」されて水利学校に入学し、80年5月には予科の課程を「卒業」していることが分かっている¹²。彼が借金をした理由をみると、理由は様々あるが、多くは荒川筋や関宿などに「留学」している間に発生した「臨時入用」によるものであった¹³。

複数いた社費生徒のなかでも特筆すべきは、川島滝蔵という人物である。川島は、1858年（安政5）8月13日、遠江国磐田郡於保村大字濱部（現在の静岡県磐田市）に生まれ、政治家であるとともに地域の実業家として活躍した人物であった¹⁴。川島は、19歳のときに父の代理で治河協力社社員となって社務に従事し、その後水利学校の「塾幹」となって約2年間、生徒を監督しつつ自身も同校で学んだ。

表2は、2021年3月現在確認している、川島が社費生の時代に明善から金を借りたことがうかがえる借用金証書の一覧である。これをみると、1880年（明治13）6月19日から1881年（明治14）10月22日の期間に川島が計6回にわたって明善から総額195円を借用

表1 鈴木治三郎による借入金証書一覧

借用者名	宛所	金額	借用年月日	備考
鈴木治三郎代理 山下長作	金原明善	10円	明治12年5月26日	売ヶ年金三拾円無利足ニテ拝借可仕御 約定之内前頭受納借用
鈴木治三郎	金原明善	10円	明治13年5月27日	樋之口村留学中前記金員借用
鈴木治三郎	金原明善	8円	明治13年8月10日	年金三拾円無利足之内借用
鈴木治三郎	金原明善	8円	明治13年10月11日	年金三拾円無利足之内借用
鈴木治三郎	金原明善	15円	明治14年4月30日	関宿留学中臨時入用ニ付拝借
鈴木治三郎	金原明善	15円	明治14年8月13日	荒川留学中臨時入用ニ付借用
鈴木治三郎	治河協力社出納掛	20円	明治14年12月30日	荒川留学中臨時入用ニ付借用
鈴木治三郎	治河協力社会計掛	15円	明治15年5月16日	関宿留学中臨時要用ニ付借用
鈴木治三郎	治河協力社会計掛	10円	明治15年7月4日	関宿留学中臨時入用ニ付借用
鈴木治三郎	治河協力社会計掛	15円	明治15年9月3日	関宿留学中臨時入用ニ付借用
鈴木治三郎	治河協力社会計掛	10円	明治15年12月30日	関宿留学中臨時入用ニ付借用
鈴木治三郎	治河協力社会計掛	15円	明治16年1月2日	関宿留学中臨時入用ニ付借用
鈴木治三郎	治河協力社会計掛	15円	明治16年4月15日	関宿留学中臨時入用ニ付借用
鈴木治三郎	治河協力社会計掛	10円	明治16年6月18日	関宿留学中臨時入用ニ付借用
鈴木治三郎	治河協力社会計掛	10円	明治16年8月21日	関宿留学中臨時入用ニ付借用
鈴木治三郎	治河協力社会計掛	20円	明治17年1月3日	関宿留学中臨時入用ニ付借用
鈴木治三郎	治河協力社会計係	10円	明治17年4月13日	関宿留学中臨時入用ニ付借用
鈴木治三郎	治河協力社会計係	10円	明治17年6月19日	関宿留学中臨時入用ニ付借用
鈴木治三郎	治河協力社会計係	10円	明治17年7月22日	利根川留学中臨時入用ニ付借用
鈴木治三郎	金原明善	20円	明治17年8月8日	脚気病ニ付箱根表江軋地候ニ因
鈴木治三郎	金原明善	15円	明治17年10月10日	病氣出京療養中臨時入用トシテ本年分 御予約御貸与金額外ヲ以テ借用
鈴木治三郎	金原明善	10円	7月10日	金子一ヶ年金三拾円無利足之内借用
鈴木治三郎	金原明善	7円70銭	8月19日	金子戸川先生より借用
合計		288円70銭		

【備考】金原家文書KM-19-40およびKM-22-1をもとに筆者作成。

表2 川島淹蔵による借入金証書一覧

借用者名	宛所	金額	借用年月日	備考
川島淹蔵	金原明善	30円	明治13年6月19日	豆州葦山留学中臨時入用ニ就キ拝借
川島淹蔵	金原明善	30円	明治13年10月6日	伊豆地留学中臨時入用ニ付前金拝借
川島淹蔵	金原明善	20円	明治13年11月22日	無拠要用ニ差支
川島淹蔵	金原明善	40円	明治14年4月17日	学業中要用ニ差支
川島淹蔵	金原明善	50円	明治14年9月15日	総地留学中臨時入用ニ就キ拝借
川島淹蔵	金原明善	25円	明治14年10月22日	留学中臨時入費ニ差支
合計		195円		

【備考】金原家文書KM-22-1をもとに筆者作成。

していたことがわかる。借用の理由をみると、伊豆・葦山や「総地」（上総）での「留学」中に発生した「臨時入用」のほか、具体的には分らないが「無拠要用ニ差支」えたことなどがある。『小伝』によれば、「余ハ金原氏ノ知遇ヲ受ケ氏ノ援助ニヨリ伊豆国葦山町柏木忠俊君ノ後室方ニ寄寓シ同地方ノ有力家仁田常種君其他ノ経営セシ牧羊、開墾、試験場ニ入場実習スル」とあり¹⁵、川島が旧幕臣で葦山代官所手代を務めた柏木忠俊の後室のもとに寄留し、葦山で畜産業を営んでいた実業家・仁田常種¹⁶らのもとで「実習」に従事していたことがわかる。借入金証書に記された「留学」とは、この仁田のもとにおける「実習」のことを指すと思われる。明善は、国内のあちこちに「留学」して河川土木に関する勉強に励む生徒たちに対し積極的に金銭的な援助を行っていたが、土木と直接関係のない牧畜に関する実習に従事していた川島にも金銭的な援助を行っていたのである。

以上のように、同家文書のなかには、治河協力社とその関係者にまつわる様々な歴史資料が存在していることがわかる。今後は、これらの史料を活用しながら、治河協力社の実態を詳らかにしていくことが求められる。

3. 金禄公債証書の保有による事業資本の確保

本節および次節では、金原家文書にある「事務書類」という史料を分析の手がかりとして、治河協力社の「事務」の具体的な内容と、そこからうかがえる治河協力社の歴史像について検討してみたい。なお、同史料は、『金原明善資料』下に「事務書類」として翻刻・収録されているが¹⁷、註で内容を抜粋している旨が表記されているとおり、資料集には完全体では収録されていない。そこで本稿では、資料集に収録されていない部分を翻刻し、そこから浮かび上がる治河協力社の「事務」の内実をみていくことにしたい。

具体的な内容の検討に入る前に、「事務書類」の概要を見ておこう。表3（別添）は、同資料の構成をまとめたものである。表をみると、「事務書類」は全部で54件の内容から構成されていることが分かる。それらの多くは、官庁からの達しといった公文書の写しなど、記録用の手控えとして筆写された書類である。内容をみると、同社で働いていた社員の氏名とその動静がうかがえるものや、同社の運転資金の収支が分かるものなど多岐にわたる。そのうち、資料集に翻刻・収録されているものは27件であり、残りの27件は未収録であった。この27件が資料集に収録されなかった要因は、明確には分らないが、恐らく内容的に治河協力社の事業に直接関わるものではないと判断されたために、資料集編纂の段階で割愛されたと考えられる。しかしながら、内容を細かくみていくと、資料集に収録されなかった部分も治河協力社の性格を検討する上では極めて重要な素材であることがわかった。一例を挙げれば、天竜川の水位や水量を記録するための用紙の購入方法をめぐる長野県とのやり取り（表3の31）など、天竜川治水に直接的に関わる事柄が挙げられる。その一方で、直接は治水工事に関わらない事柄もいくつか業務として存在していたことが分かる。では、具体的にどのような内容が割愛されていたのであろうか。紙幅の都合上、そのすべてを紹介することは難しいので、ここでは以下2点に絞ってみたい。

最初に見るのは、静岡県会計課との間で交わされた金禄公債証書の預託をめぐるやり取りの軌跡である。「事務書類」をみると、1879年（明治12）から1884年（明治17）の間

表4 金禄公債証書をめぐる治河協力社（明善）と静岡県との交渉一覧

表3に おける 番号	項目	年代	作成	宛所
49	証(金禄公債証書1250円分正に預置候二付)	明治12年9月16日	静岡県会計課	—
4	記(七分利金禄公債証書額面2万5980円也)	明治16年11月15日	治河協力社社長 金原明善	静岡県会計課公債係 御中
5	記(七分利金禄公債証書額面2万8100円県庁御預分相違無御座候二付)	明治16年11月15日	治河協力社社長 金原明善	静岡県会計課公債係 御中
6	記(七分利金禄公債証書3万6780円分県庁御預分相違無御座候二付)	明治16年11月15日	遠江国長上郡安間村 金原明善	静岡県会計課公債係 御中
11	証(金禄公債証書高2万円分正に相預り候二付)	明治16年12月26日	静岡県会計主務二等属 小泉武謙	治河協力社々長 金原明善殿
13	記(金78円内務省より大蔵省出納局を経て回達相成候二付)	明治17年1月14日	静岡県会計課長二等属 小泉武謙	豊田郡中野町村治河協力社 御中
12	証(金禄公債証書高3万6780円正に相預り候二付)	明治17年1月28日	静岡県会計主務二等属 小泉武謙	協力社長 金原明善殿
24	記(七分利金禄公債証書8万4880円分御預公債証書相違無御座候二付)	明治17年5月12日	治河協力社社員 金原明徳	静岡県会計課公債係 御中
25	証(金禄公債証書県庁御預分1250円相違無御座候二付)	明治17年5月12日	治河協力社社員 金原明徳	静岡県会計課公債係 御中
36	証(金禄公債証書1250円分13枚県庁御預相違無御座候二付)	明治17年11月12日	長上郡安間村金原明善代理 金原幸平	静岡県会計課公債係 御中
50	証(金禄公債証書1万2370円分正に相預り候二付)	明治18年3月13日	会計主務静岡県三等属 小泉武謙	金原明善殿
【備考】「事務書類」をもとに筆者作成。額面および数量は、原史料のまま。				

に治河協力社と静岡県会計課との間で七分利付の金禄公債をめぐって度々やり取りがなされていたことが分かった（表4）。例えば、次のような史料である（句読点は引用者、以下同じ）。

証

金禄公債証書

一高貳万円

内

五百円券 三拾三枚

三百円券 貳 枚

百円 券 貳拾六枚

五拾円券 五 枚

貳拾五円券 貳 枚

合計六拾八枚

右正ニ相預り候、後日受取方申出候節ハ此証書持参引換可相渡候也

明治十六年十二月廿六日

静岡県会計主務二等属小泉武謙 [印]

治河協力社々長

金原明善殿

右証書十八年三月官金出納之節公債掛江返上之事

上の史料によれば、1883年（明治16）12月26日に静岡県会計課が明善所有の金禄公債証書計68枚（2万円分）を預かったことがわかる。なお文末には、治河協力社側の記録として「右証書十八年三月官金出納之節公債掛江返上之事」との記載があり、上記の証書が1885年（明治18）3月に官金を出納した際に会計課の公債係へと返上されたことがうかがえる。

この史料から分かることは、明善が自身の所有する金禄公債を静岡県庁に預けていたという事実である。当時明善は、大量の金禄公債を所有していた。1881年（明治14）10月に明善が静岡県令大迫貞清に宛てて提出した治河協力社の「資金明細書」で、「増殖方法ノ儀ハ第一項金拾五万四千二百八拾円余ハ漸次公債証書ヲ買収シ御庁之御管理相願候積リ」と述べていることから、明善が金禄公債を買い入れることで同社の資産を増殖させようとしていたことが分かる¹⁸。上に示した史料以外にも、明善が静岡県に金禄公債を預けたことがわかる史料は複数確認でき、なかには金禄公債を所持したことで発生した金であろうか、内務省から大蔵省出納局を経て金78円が「回達」されたことを伝えるものもある（表3の14）。明善は、大量の金禄公債を所有しながら、治河協力社の資産増殖に意を用いていたのである。

このように、明善は、治河協力社の資本を増殖させる目的で、大量の金禄公債を取得していた。士族授産をめぐる研究史のなかでも、金禄公債が企業の資本として転化されていた事例はしばしば確認されており¹⁹、今回確認した治河協力社のケースもそれに類するものと考えられる。なお、明善が金禄公債を取得していた事実については『金原明善』でも触れられているが、明善が具体的に誰から、いかなる経緯で金禄公債を購入していたのかについては検討されていない。今後は、当時明善の周囲にいた旧士族たち²⁰と明善との関係を丁寧に見直すと同時に他の一次史料と突き合わせながら、公債取得のプロセスを明らかにしていく必要がある。

4. 明治10年代後半の明善のネットワーク

「事務書類」からは、明治10年代後半における明善の様々な人的ネットワークの位相が確認できる。まずは、次の史料を見て欲しい。

証

一 金壱万円也

右金額預り置候処実正也、御入用之節者何時成共此証引換御渡し可申候也

三井物産会社 [印]

明治十六年第七月二十三日

元締 馬越恭平 [印]

三井養之助 [印]

治河協力社々長

金原明善殿

史料によると、1883年（明治16）7月23日に明善が三井物産会社に金1万円を預けていたことが分かる。明善が三井物産会社に金を預けた背景については、現時点では定かではない。だが、ここで注目しておきたいのは、金銭のやり取りの内実もさることながら、明治16年の時点で治河協力社が三井物産会社と取引関係にあったという事実である。この関係は、あるいは明善と馬越恭平・三井養之助（高明）との人的ネットワークにもとづいて構築されたものかもしれない。このうち、三井養之助との交流については、現時点では詳らかにし得ないが、明善と馬越の交流については、他の史料でも確認することができる。明善が明治12年～14年の間に作成したと思しき「雑記帳」には、馬越が伊藤博文や松方正義ら有力政治家とともに椎茸の送り先の一つに数えられていることから²¹、金銭のやり取りがなされる明治16年より前から明善と馬越は関係があったと推察される。

また、治河協力社と三井物産会社とのやり取りはこればかりではなかった。「事務書類」には、1884年（明治17）3月10日の日付けで当時まだ官営だった三池鉱山局から治河協力社社長の明善に対し、治河協力社で働く小林八郎という人物を「当局ニ於テ取調」べたいので「借用致度」い旨を申し入れる文書の写しが書き残されている（表3の22）²²。

ここで名前が挙がっている小林八郎は、山口県出身の旧士族で、工部大学校を卒業したあと1880年（明治13）に治河協力社に入社し、明善の援助を受けて西洋に留学した経験をもつ人物である。治河協力社への入社にあたっては、明善が松方や吉井友実、大鳥圭介らとの人脈を通じて招き入れた。翌84年（明治17）には、治河協力社を退社して内務省土木局に入省している²³。内務省に入ったあと、小林は着実に内務官僚としてのキャリアを重ねていき、1897年（明治30）12月には土木監督署技師正六位勲六等のち高等官三等²⁴、1900年（明治33）には高等官二等に叙され²⁵、1910年（明治40）2月に病気を理由に依願退職している²⁶。

三池鉱山局側が小林を取調べようとした理由は定かでない。小林に工部大学校出身というキャリアに加え留学経験もあることから、当時有能な人材を確保していた三井物産会社の意向を反映して三池鉱山局側が招き入れようとしたか。あるいは明善が、治河協力社解散後の小林の再就職先として三池鉱山局を選定し、交渉した過程でのやり取りだったかもしれない。いずれにしても「事務書類」に収録された記事からは、明治16～17年にかけて治河協力社（明善）が三井物産・三池鉱山局と、巨額の金が動く取引や社員の移動を伴うやり取りを展開していたことが分かるのである。治河協力社の研究史において、同社が三井物産会社や三池鉱山局と関係性を有していた事実が指摘されたことはなく、今後治河協力社の性格や歴史的 position を再考していくうえでも重要な論点になると指摘しておきたい。

当該期の明善のネットワークは、別の史料からもうかがえる。表5は、1883年（明治16）12月に明善が作成した、恐らくは歳暮であろう芋の贈答先（人名・住所）と大きさ、およびその個数をまとめたものである。この表をみると、合計48名に宛てて大芋1015個、小芋105個が贈られようとしていたことが分かる。史料中には、「右之通乍御手数夫々御配賦方御依頼申上候」とあり、明善が誰かに芋の発送を「依頼」している様子がうかがえるが、明善が具体的に誰に「依頼」したかについては、「事務書類」には記されていないため分からない。だが、1885年（明治18）11月11日に明善が義弟であり治河協力社社員だった金原幸平に送った書簡のなかで、明善が幸平に「先年の振合」で里芋の発送を依頼していることから類推するに、芋の発送に従事したのは金原幸平と、金原家の番頭を務めていた高柳弥平の二人だったと考えられる²⁷。

表に注目すると、宛先の大多数は政府関係者だったことが分かる。なかには、明治新政府で太政大臣を務めた三条実美（21）や右大臣を務めた岩倉具視（26）、大久保利通亡き後の明治政府で実力を発揮した伊藤博文（34）など、明治政府内の実力者たちの名前が複数散見される。そのなかで最も個数が多いのは、旧幕臣で当時宮内省に出仕していた川村正平で、大芋150頭と小芋60頭を贈るよう指示されている²⁸。川村正平は、武蔵国多摩郡上長房村の小仏関所の生まれで、同関所番見習を勤めたあと一橋家の家臣となり、徳川慶喜の側近として周旋活動に参画、明治改元後は内務省・太政官等の官僚として働いた人物である²⁹。1887年（明治20）に明善が従五位を返上しようとした際には、土方久元とともに明善の願いが達せられるように尽力した人物でもあった³⁰。川村だけ桁違いに個数が多いのは、川村の寄留先である二条家の面々に対しても川村を介して芋を贈ろうとしたからであろうか。

表5 芋贈答先及び種類・個数一覧

No.	住所	氏名	個数	備考
1	東京駿河台北甲賀町拾六番地	土方久元	大芋30頭	右欄に「(大芋)25頭」と記載。
2	同駿河台東紅橋町貳番地	大塚謙三郎	大芋15頭	
3	同飯田町六丁目廿壱番地	山田顯義	大芋15頭	
4	同飯田町壱丁目壱番地	大隈重信	大芋15頭	
5	同小川町今川小路貳丁目七番地	桜井能監	大芋30頭・小芋25頭	
6	同神田錦町壱丁目貳番地	徳大寺実則	大芋15頭	
7	同神田中猿楽町十七番地	福永信治	大芋15頭	
8	同神田猿楽町壱丁目六番地	山崎直胤	大芋15頭	
9	同麹町平川丁五丁目十八番地	杉孫七郎	大芋15頭	
10	同牛込築土前町十六番地二條殿御邸内	川村正平	大芋150頭・小芋60頭	
11	同牛込弁天町七十六番地	城多董	大芋15頭	
12	同牛込南山伏町壱番地	佐伯惟馨	大芋15頭	
13	同本郷春木町貳丁目五十四番地	男谷忠友	大芋15頭	
14	同本郷区森川町壱番地	高橋有方	大芋20頭	
15	同下六番町五十七番地	金井之恭	大芋15頭	
16	同番町法服坂上	郷純造	大芋15頭	
17	同日本橋区村松町廿四番地	林厚德	大芋15頭	
18	同三十間堀三丁目壱番地	高石辰吉	大芋30頭・小芋20頭	
19	同小細町四丁目八番地	安田善次郎	大芋15頭	
20	同裏霞が関	大久保利和	大芋15頭	
21	同永田町壱丁目貳番地	三條殿様	大芋15頭	
22	同永田町貳丁目十六番地	有栖川宮	大芋15頭	
23	同永田町貳丁目十五番地	吉井友実	大芋15頭	
24	同永田町貳丁目十四番地	高崎正風	大芋15頭	
25	同永田町貳丁目廿五六七番地	前嶋密	大芋15頭	
26	同宝田町三番地	岩倉殿	大芋15頭	
27	同赤坂溜池コ火南坂町壱番地	佐々木高行	大芋25頭	
28	同溜池霊南坂町七番地	中村孝禧	大芋15頭	
29	同赤坂田町三丁目十四番地	西村捨三	大芋25頭	
30	牛込区上宮比町五番地	衣笠豪谷	大芋15頭	欄外に記載。
31	同三田町貳丁目十一番地	松方正義	大芋15頭	
32	同四ツ谷仲町三丁目十六番地	山岡鉄太郎	大芋15頭	
33	同麻布狸穴町五十八番地	林友幸	大芋25頭	
34	同芝区高輪南町三十六番地	伊藤博文	大芋15頭	
35	同高縄町四番地九鬼隆一様方	前田正名	大芋15頭	
36	神田五軒丁十五番地	小野正弘	大芋15頭	欄外に記載。
37	日本橋区通三丁目丸家書店奥	早矢仕有的	大芋15頭	欄外に記載。
38	同高輪北町五十二番地	小林秀知	大芋25頭	
39	同白金猿町六十七番地	寺嶋宗則	大芋15頭	
40	同白金丹波町五番地	石井省一郎	大芋25頭	
41	同白金村五百廿三番地	大鳥圭介	大芋15頭	
42	同北豊嶋郡金杉村貳百廿貳番地	古市公威	大芋15頭	
43	飯田町三丁目十三番地	奈良原繁	大芋20頭	欄外に記載。
44	駒込東片町百三十七番地	南市郎平	大芋15頭	欄外に記載。
45	同白金丹波町五番地	宇佐美房輝	大芋25頭	
46	同本所柳原町壱丁目	清水誠	大芋15頭	
47	駿河台袋町九番地	櫻井勉	大芋15頭	欄外に記載。
48	飯倉狸穴町四番地	川村純義	大芋15頭	欄外に記載。
	計	48口	大芋1015頭・小芋105頭	

【備考】「事務書類」（表3の40）をもとに筆者作成。

ちなみに川村は、「事務書類」の後半に記された「有志者寄附」（表3の53）によって、金70円を治河協力社に寄付していることがわかっている。

次いで多いのは桜井能監の大芋30頭と小芋25頭、以下高石辰吉の大芋30頭と小芋20頭とつづく。川村に次いで多くの芋を贈るよう指示されている桜井能監は、江戸後期の俳人で「天保の三大俳家」の一人である桜井梅室の息子であり、明治政府では宮内省に出仕していた人物である。桜井も川村と同様、1887年（明治20）に金原が従五位の位記を返上しようとした際、土方久元や川村正平とともに宮内省の側から明善の願いを成就させようと尽力した人物であった。

明善が芋を贈ろうとした人物を細かく見ていくと、内務省や工部省、そして宮内省の政治家や官僚が多く見られることがわかる。内務省関係では、1883年（明治16）当時内務卿を務めていた山田顕義（3）を筆頭に、初代土木局長を務めた石井省一郎（40）や日本の土木工学、土木行政の近代化に尽力した古市公威（42）などの名前が見受けられる。工部省関係では、明治16年時に工部卿を務めていた佐々木高行（27）を筆頭に、三池炭鉱の経営に関与した小林秀知（38）や初代工部大学校長を務めた大鳥圭介（41）などの名前がある。こうした内務・工部省関係者、さらには大蔵卿を務めていた松方正義（31）や『興業意見』を著した前田正名（35）といった大蔵省関係者に芋を贈るよう企図された背景には、この三省が天竜川治水事業を進める上で密接に関わる機関だったからであろう。明善は、芋という農産物を贈ることを通して、内務・工部・大蔵省の要人たちとの関係性を維持しようとしていたことが分かる。

なお、内務・工部・大蔵の三省に加えて、宮内省関係者にも複数贈られようとしていたことは注目してよい。具体的には、当時宮内卿を務めていた徳大寺実則（6）をはじめとして、宮中保守派の主要人物であった土方久元（1）や吉井友実（23）の面々である。このうち、土方と吉井、さらに御歌所初代所長を務めることになる高崎正風（24）と先述した佐々木の4名は、明治10年代初頭に天皇親政運動を展開したグループであった。明善もまた、1873年（明治6）に火災で焼失した皇居の再建費用を献納しようとして、1879年（明治12）9月13日に「同志」とともに「皇居御建築相成度並献納金之儀ニ付懇願書」³¹を静岡県に提出しているが、この動きも佐々木らによる天皇親政運動に連動したものと考えられる。明治10年代における明善の人的ネットワーク、さらに明善の思想形成のプロセスを考える上でも、内務・工部・大蔵の三省に加えて宮内省、とりわけ宮中保守派の面々にも芋が贈られようと

していた事実は見逃せないのである。

5. むすびにかえて

本稿では、金原家文書に含まれている治河協力社に関する歴史資料の一つである「事務書類」を手がかりにして、治河協力社が取り扱っていた「事務」の内実を考察した。その結果、金禄公債をめぐる明善と静岡県とのやり取りの軌跡や、1883年（明治16）12月に明善が政府関係者を中心に大芋・小芋を贈ろうとしていた痕跡などが明らかになった。本研究によって、金禄公債証書が治河協力社の資産として大量に取得・保有されていたことや、明善の人的ネットワークの具体的な位相など、これまでの研究史では限定的に触れられるか、あるいは全く触れられることのなかった諸点の具体像が明らかになったのである。

今回分析した「事務書類」には、本稿で取り上げた記事のほかにも寺田彦八郎や秋鹿邦三郎、木呂子直次郎といった治河協力社で働いていた社員たちの動向がうかがえる史料が多数含まれており、同史料は治河協力社の歴史的位置を検討する上で重要な手がかりとなることが分かった。この〈発見〉は、金原家文書という巨大な史料群を整理し、その結果抽出した一次史料を分析する過程でたどり着いたものであり、改めて史料保存（アーカイブズ）の意義を確認することができよう。今後は、今回の基礎的考察によって明らかになった事柄と、金原家文書にある他の治河協力社にまつわる史料とを照らし合わせながら、治河協力社の全体像を描き出し、その上で、日本近代史における同社の歴史的位置づけを試みる必要がある。

一次史料による新たな治河協力社の研究は、今まさに、緒についたばかりである。

[付記]

本稿は、公益財団法人クリタ水・環境科学振興財団の研究助成による成果の一部である。

表3 「事務書類」内容一覧

No.	内容	年代	作成	宛所	資料集	翻刻	備考
1	地所貸渡約定書	明治16年 5月29日	遠江国豊 田郡駒場 村地主 喜多野武 平	治河協力 社々長 金原明善 殿	○		戸長代理用係坂 口七次郎の奥印 あり。
2	[通知書] (土木生徒 秋鹿邦三郎 儀解備之上 帰社為致候 二付)	明治16年 10月22日	土木局長 石井大記 官 御印	協力社々 長 金原 明善殿	○		
3	[丙土第77 号]	明治16年 10月30日	長野県	静岡県下 遠江国豊 田郡中ノ 町 治河 協力社 御中	○		長野県公文書の 写し。天竜川量 水取扱人給料請 払書を記載。
4	治河協力社 製図場図面	—	—	—	○		
5	記（七分利 金禄公債証 書額面2万 5980円也）	明治16年 11月15日	治河協力 社社長 金原明善	静岡県会 計課公債 係 御中		記 一 七分利金禄公債証書額面貳萬五千九百八拾円也 但三百三拾枚 内訳 五百円券 三拾枚 三百円券 九枚 百円 券 九拾五枚 五拾円券 九枚 貳拾五円券 四枚 拾円 券 貳百貳拾三枚 〃 右之通二御座候也 治河協力社 明治十六年十一月十五日 社長 金原明善 印 静岡県会計課 公債係 御中	

No.	内容	年代	作成	宛所	資料集	翻刻	備考
6	記（七分利 金禄公債証 書額面2万 8100円県庁 御預分相違 無御座候二 付）	明治16年 11月15日	治河協力 社社長 金原明善	静岡県会 計課公債 係 御中		記 一 七分利金禄公債証書額面貳萬八千百円也 但百貳拾七枚 内訳 五百円券 貳拾四枚 号番明細ニ記入致候事 三百円券 四拾六枚 右同断記入致候事 百円券 拾六枚 右同断 五拾円券 五枚 右同断 貳拾五円券 六枚 前同断明細記入致候事 拾円券 三拾枚 前同断 ㄥ 右者県庁御預分相違無御座候也 明治十六年十一月十五日 静岡県会計課 公債係 御中 治河協力社 社長 金原明善 印	
7	記（七分利 金禄公債証 書額面1250 円県庁御預 分相違無御 座候二付）	明治16年 11月15日	遠江国長 上郡安間 村 金原 明善	静岡県会 計課公債 係 御中		記 一 七分利金禄公債証書額面千貳百五拾円也 但拾三枚 内訳 百円券 拾貳枚 記番号明細記入致候事 五拾円券 壹枚 丙ゐ号 七六〇四 右者県庁御預分相違無御座候也 明治十六年十一月十五日 静岡県会計課 公債係 御中 遠江国長上郡安間村 金原明善 印	
8	証（金1万円 御預り実正 二付）	明治16年 第7月23 日	三井物産 会社元締 馬越恭平 外1名	治河協力 社々長 金原明善 殿		証 一 金壹万円也 右金額預り置候処実正也、御入用之節者何時成共此証引換御渡し可申候也 明治十六年第七月二十三日 三井物産会社 印 元締 馬越恭平 印 三井養之助 印 治河協力社々長 金原明善殿	
9	[勸第365 号]	明治16年 11月14日	豊田山名 郡役所	豊田郡中 ノ町村戸 長役場中	○		雛形あり。

No.	内容	年代	作成	宛所	資料集	翻刻	備考
10	[親第885号]	[明治] 16年12月 15日		豊田郡中ノ町村戸長役場中		勸第八百八十五号 其村ニ係ル（渡舟橋梁）賃請求スルケ所及御許可ニテ賃銭請求候向取纏之儀勸第三百五十六号ヲ以相違置候处于今差出無之差■候条此達披見次第■■取調差出べし、此段再度相違候也、 十六年十二月十五日 磐田豊田山名郡役所 豊田郡仲ノ町村 戸長役場中	
11	[豊田郡中野町村源平新田間天竜川橋梁の賃料書上]	明治16年 12月24日	治河協力社々長 金原明善	中野町村戸長 御中		豊田郡中野町村源平新田間天竜川 架橋 明治七年二月十七日許可 賃銭 歩行杵人 金九厘 長棒駕籠杵挺 金三銭五厘 引戸駕籠杵挺 金三銭 山臺駕籠杵挺 金貳銭 両掛分椅杵所 金九厘 大長持杵棹 金貳銭六厘 小長持杵棹差樽杵荷 金壹銭六厘 人力車杵輛 金貳銭壹厘 牛馬杵匹 金三銭 馬車杵輛 金八銭五厘 ノ 右之通御座候也 治河協力社々長 明治十六年十二月廿四日 金原明善 印 中野町村 戸長御中	
12	証（金禄公債証書高2万円分正に相預り候二付）	明治16年 12月26日	静岡県会計主務二等属 小泉武謙	治河協力社々長 金原明善殿		証 金禄公債証書 治河協力社長 一高貳万円 金原明善所有 内 五百円券 三拾三枚 三百円券 貳枚 百円 券 貳拾六枚 五拾円券 五枚 貳拾五円券 貳枚 合計六拾八枚 右正ニ相預り候、後日受取方申出候節ハ此証書持参引換可相渡候也、 明治十六年十二月廿六日 静岡県会計主務二等属小泉武謙 御印 治河協力社々長 金原明善殿 右証書十八年三月官金出納之節公債掛江返上之事	

No.	内容	年代	作成	宛所	資料集	翻刻	備考
13	証（金禄公債証券券高3万6780円正に相預り候二付）	明治17年 1月28日	静岡県会計主務二等属 小泉武謙	協力社長 金原明善殿		証 丙号 金禄公債証券 一券高三万六千七百八拾円 内 五百円 三拾枚 三百円 拾枚 百 円 百五拾枚 五拾円 拾壹枚 廿五円 八枚 拾 円 貳百貳拾三枚 右正二相預り候、後日受取方申出候節ハ此証書持参引換可相渡候也 明治十七年一月廿八日 静岡県会計主務二等属小泉武謙 御印 協力社長 金原明善殿 右証書十八年三月官金出納之節公債掛江返納之事	
14	記（金78円内務省より大蔵省出納局を経て回達相成候二付）	明治17年 1月14日	静岡県会計課長二等属 小泉武謙	豊田郡中野町村 治河協力社 御中		記 一金七拾八円 但遠江国豊田郡中野町村治河協力社渡 右金額内務省ヨリ大蔵省出納局ヲ経テ回達相成候間受取方御申出可相成候、 此段及御通知候也 明治十七年一月十四日 静岡県会計課長 二等属小泉武謙 御印 豊田郡中野町村 治河協力社 御中	
15	辞表	明治17年 1月14日	熊谷三郎 馬（印）	治河協力社々長 金原明善殿	○		
16	[辞令書] （幹事兼庶務係長熊谷三郎馬依御申出解任候二付）	明治17年 1月15日	治河協力社長 金原明善	幹事兼庶務係長 熊谷三郎馬	○		
17	[辞令書] （当社修築係附属員に相任候二付）	明治17年 1月	治河協力社長 金原明善	木呂子直次郎殿	○		月給として金6円支給する旨記載。

No.	内容	年代	作成	宛所	資料集	翻刻	備考
18	[本年一月廿九日附達量水標取扱心得書第一項中筆算紙料トアルハ雑費ノ誤ニ候旨内務書記官ヨリ通報有之候条此旨相違候事]	明治17年2月8日	静岡県	治河協力社		治河協力社 本年一月廿九日附無号達量水標取扱心得書第一項中筆写紙料トアルハ雑費ノ誤ニ候旨内務書記官ヨリ通報有之候条此旨相違候事 明治十七年二月八日 静岡県	
19	[太政官布達第三号]	明治17年2月15日	[太政大臣三条実美外1名]	-	○		明治15年2月の第3号布達の改正（民有林の中水源を養い土砂を止める機能を有する森林の伐採等を伴う事業については停止させることがある旨）を布告する内容。
20	[農商務省第三号]	明治17年3月1日	[農商務卿 西郷従道]	府県	○		明治17年2月第3号を以て明治15年2月第3号布達改正之儀布達に伴って明治15年2月当省第3号布達も改正する旨。
21	[太政官第三号]	明治15年2月1日	[太政大臣 三条実美外1名]	府県	○		明治15年2月13日発出の達（水源涵養ほか国土保安に関係ある箇所を伐木しようとするものについては、その都度実地検分して処分する旨）の写し。
22	[乙第215号]	[明治]17年3月10日	三池鉱山局	治河協力社長 金原明善殿	○		小林八郎の「取調」の件について。

No.	内容	年代	作成	宛所	資料集	翻刻	備考
23	[書状]	明治17年 3月18日	治河協力 社々長金 原明善不 在ニ付同 社々員 金原幸平	三池鉱山 局 御中	○		
24	辞職願（私 儀病氣ニ 付）	明治17年 3月15日	天龍川河 身改修事 務取締 川村矯一 郎	静岡県令 奈良原繁 殿	○		明治17年3月24 日付静岡県発 出文書（川村の 辞職願を聞き届 けた旨）の写し。
25	記（七分利 金禄公債証 書8万4880円 分御預公債 証書相違御 座無ニ付）	明治17年 5月12日	治河協力 社社員 金原明德	静岡県会 計課公債 係 御中		記 一七分利金禄公債証書額面八万四千八百八拾円也 但六百三拾五枚 内 額面 五百円 八拾七枚 同 三百円 五拾八枚 同 百 円 貳百枚 同 五拾円 貳拾壹枚 同 貳拾五円 拾六枚 同 拾円 貳百五拾三枚 ノ 右之通県庁御預公債証書相違無御座候也 明治十七年五月十二日 静岡県会計課 公債係御中 治河協力社 社員 金原明德 印	
26	記（七分利 金禄公債証 書県庁御預 分1250円相 違無御座候 ニ付）	明治17年 5月12日	治河協力 社社員 金原明德	静岡県会 計課公債 係 御中		記 七分利金禄公債証書 一額面千貳百五拾円也 但拾三枚 内 額面 百円 拾貳枚 同 五拾円 壹枚 ノ 右者金原明善所有分県庁御預公債証書相違無御座候也 明治十七年五月十二日 静岡県会計課 公債係 御中 治河協力社 社員 金原明德 印	

No.	内容	年代	作成	宛所	資料集	翻刻	備考
27	[辞令書] (小林八郎 内務省御用 掛及び土木 局勤務とし て静岡県在 勤申付候二 付)	明治17年 6月3日	内務省	小林八郎	○		
28	[第194号] (写)	明治16年 11月21日	土木局長 石井大記 官	飯塚十三 等出仕殿	○		工師デ・レーケ の天龍川並びに 大井川筋検分出 張について。
29	御届(右実 印用候二 付)	明治17年 6月20日	寺田彦八 郎(印)	治河協力 社 御中		御届 印鑑 [印] [印] 寺田彦八郎 右実印相用候間此段御届申上候也 明治十七年六月廿日 寺田彦八郎 [印] 治河協力社御中	「彦八郎」と 「寺田」の 2種類の朱印あ り。
30	天龍川工事 計画中支払 金高(金1万 3465円87銭2 厘)	(明治17 年8月8 日)	—		○		明治11年7月～ 明治17年6月。
31	[通達] (天龍川量 水標水住日 表用紙購求 費ほか諸費 昨十六年五 月ヨリ本年 六月迄支払 別紙之通二 付)	明治17年 9月17日	長野県	静岡県遠 州豊田郡 中ノ町 治河協力 社 御中		県下天龍川量水標水位日表用紙購求費并備付品修繕其他諸費昨十六年五月ヨリ本年六月迄支払別紙之通有之候、就テハ該費金之義ハ十六年五月ヨリ同年十月迄量水標取扱人月給残額金六円之内ヨリ差継払取計候間此旨通報及ヒ候也 明治十七年九月十七日 長野県 御印 静岡県遠州豊田郡中ノ町 治河協力社 御中 追テ本費支払残金三円八拾銭三厘ハ返戻可致■■■分之回答相成度候也 ○ 記 一金貳円拾九銭七厘 内訳 金七拾銭貳厘 但水位日表用紙十七年四月ヨリ十八年三月迄 十二ヶ月至数三百六拾枚下渡費 金五拾銭 但上伊那郡宮田村量水標取扱人細田伝弥預リ時計修繕費 金四拾貳銭五厘 但量水標取扱人備付品下伊那郡役所ヨリ上伊那郡役所江通送費 金貳銭五厘 但前同断御用提灯文字記入費	

No.	内容	年代	作成	宛所	資料集	翻刻	備考
32	[会第887号 写]	明治17年 7月21日	会計主務 長野県三 等属 熊 倉美稚	東京日本 橋区檜物 町10番 地 丸家 銀行ニテ 金原明善 殿	○		天龍川量水取扱 人給料其他諸費 として金100円 正に領収の旨。
33	治河協力社 元資金仕訳 書（金17万 円也）	-	-	-	○		
34	[貸付金、 地所代金ほ か諸経費書 上]（金17 万3590円77 銭4厘）	-	-	-		一金拾七万三千五百九拾円七拾七銭四厘 内 金六万三千八百四拾壹円八拾六銭五厘 貸付金 金貳万六千六百貳拾七円七拾貳銭九厘 地所代金 金貳千四百八拾五円拾八銭 家屋并器械 金八万六千三百六拾六円 金禄公債証書 額面八万四千八百八十円 内 金五万円也 下付金 金貳万千七百七拾五円貳拾壹銭 工費残額 金六万六千六百拾四円貳拾六銭 金原明善寄附金 金四万八千八百壹円三拾銭四厘 増殖金	
35	明治十七年 十月廿二日 日計表	（明治17 年10月22 日）	-	-		明治十七年十月廿二日日計表 一金拾七万五千七百五拾円八拾貳銭壹厘 六月三十日ヨリ資本高 内金千七百五円六拾八銭貳厘 七月一日ヨリ十月廿二日迄収入支出計算減 引金拾七万四千四拾五円拾三銭九厘 内訳 金六万七千九百四拾貳円六拾六銭八厘 金禄公債 金貳万六千六百貳拾七円七拾貳銭九厘 地所 金貳千四百八拾五円拾八銭 家屋并器具 金三千八拾円 西遠商会株 金五万八千三百四拾三円八拾貳銭壹厘 貸付金 金壹万八千八百八拾七円九銭五厘 丸家預ケ金 金三千七百九拾円四拾壹銭 無利息貸付 金貳千百拾円五拾三銭七厘 小作出納金 金三百四拾四円八拾六銭九厘 橋費仮出 金七千四百四拾四円三拾三銭五厘 仮出 小以金八万九千九百貳拾壹円六銭七厘 内 金四千三百拾五円三拾五銭 預り金 金壹万〇貳百九拾九円 銀行借入 金千五拾壹円三拾銭三厘 仮預り金 金千百貳拾円六拾四銭四厘 橋銭預り 合金壹万六千七百七十八円廿九銭七厘	
36	記（8万4880 円分県庁御 預公債証書 相違御座無 二付）	明治17年 11月12日	治河協力 社社長金 原明善代 理 金原 幸平	静岡県会 計課公債 係 御中	○		

No.	内容	年代	作成	宛所	資料集	翻刻	備考
37	記（金禄公債証書1250円分13枚県庁御預相違無御座候二付）	明治17年 11月12日	長上郡安間村金原明善代理 金原幸平	静岡県会計課公債係 御中		記 七分利金禄公債証書 一 額面千貳百五十拾円也 但拾三枚 内 百円券 拾貳枚 五十拾円券 壹枚 右者金原明善所有分県庁御預相違無御座候也 長上郡安間村 明治十七年十一月十二日 金原明善代理 金原幸平 印 静岡県会計課 公債係 御中	
38	[時事新報 817号広報] (写)	明治17年 11月18日	太政大臣 三条実美	—		○時事新報八百十七号公報 太政官達第九十四号 官省院庁府県 凡ソ官有地ハ人民ニ使用ヲ許シタルモノヲ除クノ外其所在区町村費ノ賦課ニ応セサル儀ト心得ヘシ、此旨相達候事 但道路疏水等ノ為メ該区町村ヘ手当金ヲ給与スルハ各々適宜タルヘシ 明治十七年十一月十八日 太政大臣三条実美	
39	[出頭命令]	明治17年 11月21日	静岡県	秋鹿邦三郎殿		御用候条本月廿四日午前第十時礼服着用出頭可致候旨相達候也 明治十七年十一月廿一日 静岡県 秋鹿邦三郎殿	
40	記（大芋発送先及び個数一覧）	明治16年 12月	遠州天竜橋西側中野町村堤上治河協力社 金原明善	—		(表5参照)	
41	[治河協力社元資金仕訳書]（明治11年度～17年度分）	明治18年 1月22日	治河協力社々長 金原明善	静岡県令 関口隆吉殿		(表6参照)	
42	治河協力社出納調（明治11年度～16年度分）	—	—	—		(表7参照)	
43	治河協力社資本官私区分表	—	—	—		一金八万八千三百九拾六円拾六錢四厘 官 一金九万五千六百六拾三円拾八錢七厘 社 小計金拾八万四千五拾九円三拾五錢壹厘 内金五万九百九拾九円八錢四厘 諸費 差引残金拾三万三千六拾円貳拾六錢七厘 内訳 金六万三千八百九拾五円五拾四錢 官 金六万九千六百六拾四円七拾貳錢七厘 社	

No.	内容	年代	作成	宛所	資料集	翻刻	備考
44	治河協力社 資本御下附 金取調書 (明治11年 度～14年 度)	—	—	—	(下841)		
45	治河協力社 資本私金取 調書(明治 11年度～16 年度)	—	—	—	(下841)		
46	有志者寄付 金(総計金 599円94銭6 厘)	—	—	—	○		
47	材木商会寄 附金(総計 金2188円32 銭)	—	—	—	○		
48	御請書(天 竜橋代金 6290円8銭8 厘)	明治18年 1月25日	金原明善	静岡県土 木課 御 中	(上690)		
49	上申(客年 12月16日付 を以て追て 何分之儀相 達する迄從 前之通事務 取扱候様御 達有之候処 今般廃止之 儀御達二 付)	明治18年 3月13日	治河協力 社々長金 原明善代 理 金原 明德	静岡県令 関口隆吉 殿	○		金額を記した別 紙あり。
50	証(金禄公 債証書1250 円分正に預 置候二付)	明治12年 9月16日	静岡県会 計課	—		証 金禄公債証書 一額面千貳百五拾円 金原明善所有 内訳 百円証書 拾貳枚 五拾円証書 壹枚 合拾三枚 右正二預置候、後日受取方申出候節ハ此証書持参ノ上引換可相渡候也 静岡県 明治十二年九月十六日 会計課 印	

No.	内容	年代	作成	宛所	資料集	翻刻	備考
51	証（金禄公債証書1万2370円分正に相預り候につき）	明治18年 3月13日	会計主務 静岡県三 等属 小 泉武謙	金原明善 殿		証 丙号金禄公債証書 一券高壹万貳千三百七拾円 遠江国長上郡安間村壹番地 金原明善所有 内 五百円 貳拾枚 三百円 三枚 百 円 四枚 五拾円 壹枚 拾 円 百貳枚 合百三拾枚 右正ニ相預り候、後日受取方申出候節ハ此証書持参引換可相渡候也 会計主務 明治十八年三月十三日 静岡県二等属小泉武謙 官印 金原明善殿	
52	明治十年橋梁追加費用操換金	—	—	—		(表8参照)	
53	有志者寄附（合計金559円54銭6厘）	—	—	—	○		
54	材木商会及漁獵人寄附（合計金2188円32銭）	—	—	—		材木商会及漁獵人寄附 一 金千七拾八円六拾六銭貳厘 内金七百六拾三円九拾壹銭貳厘 材木商 金三百拾四円七拾五銭 漁獵人 此利六拾四円七拾五銭 十一年度利 一 金六拾四円三拾銭七厘 材木商 此利壹円九拾貳銭九厘 一 金百八円壹銭三厘 全 元利合金千三百拾七円六拾三銭壹厘 此利七拾九円五銭八厘 十二年度利 一 金七拾三円拾貳銭八厘 全 此利貳円拾九銭四厘 一 金百貳円七拾五銭壹厘 材木商 元利合金千五百七拾四円七拾六銭貳厘 此利九拾四円四拾八銭六厘 十三年度利 一 金六拾七円八拾九銭貳厘 全 此利貳円三銭七厘 一 金六拾六円七拾七銭壹厘 全 元利合金千八百五円九拾四銭八厘 此利百八円三拾五銭七厘 十四年度利 一 金三拾貳円拾六銭六厘 全 此利壹円拾貳銭六厘	

表6 治河協力社元資金仕訳書

年度	金額	収支項目	年度	金額	収支項目
11年度	金2万3000円	下付金	14年度	金7万1147円17銭4厘	下付金
	内金1万1958円1銭5厘	修築費支払		金6万5471円30銭5厘	社金
	残金1万1041円1円98銭5厘	官金		合金13万6618円47銭9厘	
	金6万7548円57銭	社金		内金9992円21銭	社費支払
	合金7万8590円55銭5厘			残金12万6626円26銭9厘	
	内金3048円99銭4厘	社費支払		内訳	
	残金7万5541円56銭1厘			金6万5943円53銭4厘	官金
	内			利金2475円3銭5厘	
	金1万613円60銭1厘			金6万682円76銭5厘	社金
	利金616円71銭4厘			利金4079円68銭7厘	
	金6万4927円96銭		15年度	金6万8418円53銭9厘	官金
	利金3408円58銭4厘			金6万4777円45銭2厘	社金
12年度	金3万4230円31銭5厘	下付金		合金13万3195円99銭1厘	
	内金1万2340円96銭4厘	修築費支払		内金7910円83銭5厘	社費支払
	残金2万1889円35銭1厘	官金		残金12万5285円15銭6厘	
	金6万8521円92銭3厘	社金		内訳	
	計金9万411円27銭4厘			金6万4354円99銭5厘	官金
	内金4349円43銭9厘	社費支払		利金3959円82銭1厘	
	残金8万6061円83銭5厘			金6万930円16銭1厘	社金
	内			利金3749円8銭5厘	
	金2万836円31銭4厘	官金	16年度	金6万8314円81銭6厘	官金
	利金1301円41銭5厘			金6万4679円24銭6厘	社金
	金6万5225円52銭1厘	社金		合金13万2994円6銭2厘	
	利金4028円73銭3厘			内金7701円8厘	社費支払
13年度	金4万5137円73銭	下付金		残金12万5293円5銭4厘	
	内金2万3525円81銭1厘	修築費支払		内訳	
	残金2万1611円91銭9厘	官金		金6万4359円5銭3厘	官金
	金6万9388円91銭7厘	社金		利金3648円93銭5厘	
	計金9万1000円83銭6厘			金6万934円1厘	社金
	内金1万465円76銭7厘	社費支払		利金4118円27銭8厘	
	残金8万535円6銭9厘		17年度 上半期	金6万8007円98銭8厘	官金
	内訳			金6万5052円27銭9厘	社金
	金1万9126円38銭9厘	官金		合金13万3060円26銭7厘	
	利金2010円78銭5厘			内金8381円28銭5厘	社費支払
	金6万1408円68銭	社金		残金12万4678円98銭2厘	
	利金3899円20銭9厘			内訳	
14年度	金7万1147円17銭4厘	下付金		金6万3724円25銭7厘	官金
	金6万5471円30銭5厘	社金		利金1875円78銭4厘	
	合金13万6618円47銭9厘			金6万954円72銭5厘	社金
	内金9992円21銭	社費支払		利金2029円99銭2厘	
	残金12万6626円26銭9厘			計金12万8584円75銭8厘	
	内訳			総計金6万5600円4銭1厘	官金
	金6万5943円53銭4厘	官金		金6万2984円71銭7厘	社金
	利金2475円3銭5厘			利金2867円9銭5厘	
	金6万682円76銭5厘	社金			
	利金4079円68銭7厘				

【備考】表3の41をもとに筆者作成。数値は、原史料のまま。

表7 治河協力社出納調					
年度	金額	事項	年度	金額	事項
明治11年度	金5万8033円7銭1厘	金原明善差出金	明治14年度	金12万677円79銭6厘	前年度残高
	金1万14円1銭7厘	明治7年ヨリ同11年迄資本積立高		金5万円	河身改修費御下附金
	金2万3000円	修築受負金		金1万5348円27銭1厘	利子
	金4471円10銭7厘	利子		金1920円24銭1厘	諸収入
	金1924円75銭6厘	諸収入		小計金18万7946円30銭8厘	
	小計金10万1024円14銭			内	
	内			金196円44銭4厘	河身改修費
	金1万1958円1銭5厘	修築支払高		金1万7218円67銭7厘	修築支払高
	金561円66銭6厘	貢租並地方諸費		金2880円25銭	水利生徒内外各国修業費
	金2487円32銭8厘	社費		金717円87銭2厘	貢租並地方諸費
明治12年度	差引残金8万6017円13銭1厘		金6197円64銭4厘	社費	
	内金1万1041円98銭5厘	修築金残金	金4387円18銭3厘	貸金損失	
	金8万6017円13銭1厘	前年度残高	差引残金15万6348円23銭8厘		
	金2万3000円	修築受負金	金15万6348円23銭8厘	前年度残高	
	金8267円98銭8厘	利子	金1万7681円44銭1厘	利子	
	金2115円47銭6厘	諸収入	金439円76銭4厘	諸収入	
	内		小計金17万4469円44銭3厘		
	金1万2340円96銭4厘	修築支払高	内		
	金627円42銭7厘	貢租並地方諸費	金1549円5銭	河身改修費	
	金3722円1銭2厘	社費	金2581円60銭	水利生徒内外各国修業費	
明治13年度	差引残金10万2710円19銭2厘		金733円99銭4厘	社費	
	内金1万659円3銭6厘	修築金残余	金1459円94銭1厘	貸金損失	
	金10万2710円19銭2厘	前年度残高	差引残金16万5098円66銭7厘		
	金2万3000円	修築受負金	金16万5098円66銭7厘	前年度残高	
	金1万2080円57銭6厘	利子	金1万7928円96銭6厘	利子	
	金1297円5銭7厘	諸収入	金345円51銭8厘	諸収入	
	小計金13万9087円82銭5厘		小計金18万3373円15銭1厘		
	内		内		
	金6568円84銭7厘	修築支払高	金2416円54銭	河身改修費	
	金4157円73銭2厘	水利生徒内外各国修業費	金58円	水利生徒修業費	
明治16年度	金809円18銭6厘	貢租並地方諸費	金610円9厘	貢租並地方諸費	
	金5497円84銭9厘	社費	金4616円45銭9厘	社費	
	金1376円41銭5厘	貸金損失	金1939円26銭2厘	貸金損失	
	差引残金12万677円79銭6厘		差引残金17万3716円30銭4厘		
			内		
			金8万636円	公債証書額面8万4880円	
			金6万1548円58銭4厘	貸附金	
			内		
			金2万1556円17銭1厘	第1種	
			金1万5754円	第2種	
		金3万238円41銭3厘	第3種		
		金2万6627円70銭9厘	地所代価		
		金2485円18銭	家産並器械		
【備考】表3の42をもとに筆者作成。数値は、原史料のまま。					

表8 橋梁追架費用操換金一覧

明治 10 年 度	金額	備考		
	金1万2224円38銭6厘			
	初金916円82銭9厘			
	合金1万3141円21銭5厘			
	内金9円34銭1厘	此橋賃諸費引去残		
明治 11 年 度	金額【6月計算】	備考	金額【12月計算】	備考
	金1万3131円87銭4厘		金1万2639円50銭2厘	
	利金984円89銭1厘		利金947円96銭2厘	
	合金1万4116円76銭5厘		合金1万3587円46銭4厘	
	内金1477円26銭3厘	前同断	内金1631円87銭2厘	前同断
明治 12 年 度	金額【6月計算】	備考	金額【12月計算】	備考
	金1万1955円59銭2厘		金1万979円83銭9厘	
	利金896円66銭9厘		利金823円48銭8厘	
	合金1万2852円26銭1厘		合金1万1803円32銭7厘	
	内金1872円42銭2厘	前同断	内金1910円18銭4厘	前同断
明治 13 年 度	金額【6月計算】	備考	金額【12月計算】	備考
	金9893円14銭3厘		金8923円89銭8厘	
	利金741円98銭6厘		利金669円29銭2厘	
	合金1万635円12銭9厘		合金9593円19銭	
	内金1711円23銭1厘	前同断	内金849円72銭4厘	前同断
明治 14 年 度	金額【6月計算】	備考	金額【12月計算】	備考
	金8743円46銭6厘		金7467円43銭1厘	
	利金655円76銭		利金560円5銭7厘	
	合金9399円22銭6厘		合金8027円48銭8厘	
	内金1931円79銭5厘	前同断	内金1441円77銭8厘	前同断
明治 15 年 度	金額【6月計算】	備考	金額【12月計算】	備考
	金6585円71銭		金5981円21銭8厘	
	利金493円92銭8厘		利金448円59銭1厘	
	合金7079円63銭8厘		外金1068円8銭9厘	借入
	内金1098円42銭	前同断	合金7497円89銭8厘	
明治 16 年 度	金額【6月計算】	備考	金額【12月計算】	備考
	金7497円89銭8厘		金1万1619円6銭3厘	
	利金562円34銭2厘		利金871円43銭	
	外金3558円82銭3厘	借入	合金1万2490円49銭3厘	
	合金1万1619円6銭3厘		内金228円40銭9厘	消却
明治 17 年 度	金額【6月計算】	備考	金額【12月計算】	備考
	金1万2262円8銭4厘			
	利金919円65銭6厘			
	合金1万3181円74銭			
内金1725円56銭9厘	消却			
差引残金1万1456円17銭1厘				

【備考】表3の52をもとに筆者作成。数値は、原史料のまま。

註

- ¹ 金原明善は、遠江国長上郡安間村（現静岡県浜松市）の出身。幕末に居村の名主役に就任した頃から、明善は天竜川の治水に熱心に取り組んだ。治水の他にも、天竜川の水源涵養を企図した植林や製材業、銀行業といった様々な企業の創立と運営に携わる一方で、刑期を終えた人びとの社会復帰を支援する更生保護事業など社会事業にも多数携わった。こうした事績が評価されて、戦前から「偉人」として顕彰された人物である。
- ² 碧瑠璃園『金原明善翁』（興風書院、1890年）、水野定治『天龍翁金原明善』（積文館、1917年）、鈴木要太郎『金原明善翁と其思想』（金原翁伝記刊行会、1937年）、小野田龍彦『国土を培ふもの 金原明善一代記』（平凡社、1942年）、宮崎安右衛門「金原明善翁」（『大法輪』第22編第12号、1955年）、村上龍太郎「国土開発の先駆者 金原明善翁」（国土計画協会編『国土・総合開発・計画調査』第6編第6号、1956年）など。
- ³ 金原治山治水財団編『金原明善』（金原治山治水財団、1968年）。
- ⁴ 註3前掲書、310頁。
- ⁵ 主なものとして、以下の成果がある。老川慶喜「金原明善 その虚像と実像 天竜運輸会社の経営分析を通して」（『季刊輸送展望』第200号、1986年）、永野弥三雄「金原明善の北海道殖民農場について」（『常葉学園浜松大学研究論集』第4号、1992年）、町村敬志『開発主義の構造と心性 戦後日本がダムでみた夢と現実』（御茶の水書房、2011年）、拙稿「金原明善の天竜川治水構想と地域社会 近代移行期「名望家」の営みとその経済史的意義をめぐって」（渡辺尚志編『移行期の東海地域史 中世・近世・近代を架橋する』勉誠出版、2016年）など。なお同資料集は、金原家に遺されていた書簡などの文書や、金原明善記念館の初代館長を務めた水野定治らが収集した一次史料を基礎として編纂されたもので、その後の明善研究の水準を高めるものであった。
- ⁶ 斉藤新「金原明善 有志による天竜川改修事業の構想と頓挫」（静岡県近代史研究会編『近代静岡の先駆者』静岡新聞社、1999年）。
- ⁷ 渡辺尚志「金原明善と天竜川の治水・利水」（『静岡県地域史研究』第10号、2020年）。
- ⁸ 一次史料にもとづく明善研究の必要性と可能性については、拙稿「一橋大学附属図書館所蔵「金原家文書」解説」（『静岡県地域史研究』第10号、2020年）を参照のこと。
- ⁹ 金原家文書が一橋大学附属図書館に収蔵されるまでの経緯やその他の歴史資料の内容についての詳細は、註8拙稿を参照のこと。
- ¹⁰ 水利学校および同校の社費生徒については、拙稿「治河協力社附属水利学校の研究」（『静岡県地域史研究』第10号、2020年）を参照のこと。
- ¹¹ 「履歴書」（『金原明善資料』下、899）によれば、戸川は1844年（弘化元）申辰11月17日生まれで岡山県美作国久米郡弓削町の出身。1855年（安政2）1月から同6年9月まで頼山陽門下の宮原謙蔵（節庵）に、1860年（万延元）10月より1863年（文久3）10月まで大坂泊園書院の藤沢昇蔵（東咳）に就いて漢学を修める。1977年（明治10）7月29日に治河協力社編輯係に就任。治河協力社ではその後、1879年（明治12）3月から同13年12月まで治河協力社附属水利学校で漢学等を教授したという。

1884年（明治17）7月に浜松を引き払って東京に転籍、静修学舎を建てて子弟に漢学を教えた。1904年（明治37）1月20日、東京において死去。

¹² 金原明善翁生家記念館所蔵資料。

¹³ 1885年（明治18）8月28日に明善が金原幸平に宛てた書簡には「鈴木治三郎義脚氣病にて過日来箱根山へ湯治に罷出候、既に三週間已上に相成金三十円程（両度に渡す）貸遣し申候」とあり、社員が病を患った際にも臨時金が支払われていたことがわかる。（『金原明善資料』上、77）。

¹⁴ 川島については、註10前掲拙稿を参照のこと。

¹⁵ 川島淹蔵『小伝』（静岡県立中央図書館歴史文化情報センター所蔵「寺田家文書」、史料番号g560）。

¹⁶ 仁田は1822年（文政5）正月生まれ。駿河国田方郡函南村（現在の静岡県函南町）の出身。1871年（明治4）に居村の戸長に選ばれて1876年（明治9）まで務め、大区小区制下では四大区七小区の副区長を1872年（明治5）から明治9年まで務めた。実業面では、1873年（明治6）に有志者とともに伊豆国生産会社を創立して同社の頭取に就任し、1876年（明治9）に葦山製糸場と1880年（明治13）に牧羊社と号した牧羊場を開設するなどして、地域の産業化に率先して取り組んだ人物であった（山田万作編『岳陽名士伝』、1891年）。

¹⁷ 『金原明善資料』下、838。

¹⁸ 『金原明善資料』上、685。

¹⁹ 落合弘樹『明治国家と士族』（吉川弘文館、2001年）、畠中茂朗「近代移行期における士族授産企業の設立と展開」（『東アジア研究』第14号、2016年）など。

²⁰ 当時の明善の周辺には、治河協力社の社員だった川村矯一郎や戸川深見、後述する小林八郎など、旧士族たちが複数人存在していた。

²¹ 『金原明善資料』上、776。

²² 『金原明善資料』下、838。

²³ 同上。

²⁴ 「土木監督署技師小林八郎外十五名官等陞叙ノ件」（国立公文書館所蔵史料、請求番号：任B00160100）。

²⁵ 「土木監督署技師従五位勲六等小林八郎陞叙官等官二等ノ件」（国立公文書館所蔵史料、請求番号：任B00234100）。

²⁶ 「休職内務技師小林八郎依願免本官ノ件」（国立公文書館所蔵史料、請求番号：任B00461100）。

²⁷ 『金原明善資料』上、80。

²⁸ 1891年（明治24）にも、明善は川村に大芋150頭・小芋60頭を贈ろうとしていたことが、他の史料からうかがえる（『金原明善資料』上、159）。

²⁹ 川村については、『近現代日本人物史料情報辞典』（2、吉川弘文館、2005年）、藤田英昭「八王子出身の幕末志士川村恵十郎についての一考察」（松尾正人編『近代日本の形

成と地域社会 多摩の政治と文化』岩田書院、2006 年）など参照。

³⁰ 明善の従五位返上一件については、拙稿「金原明善のなかの天皇」（日本学研究会編『学際日本研究』第 1 号、2021 年）を参照のこと。

³¹ 『金原明善資料』上、679。

【論文】

一次史料から立ち上げる治河協力社の研究—金原家文書「事務書類」を手がかりとして—

伴野 文亮（東北大学大学院文学研究科）

要旨

本稿は、金原明善（1832－1923年）が明治7年に有志とともに設立した天竜川治水のための結社である治河協力社について、一次史料に基づいてその歴史化を試みるものである。これまでの研究史では、1968年に刊行された新谷九郎著『金原明善』を除いて、一次史料に即して治河協力社を研究するものはなかった。かかる研究史的課題を踏まえて、本稿では金原家文書「事務書類」を手がかりとして、金禄公債証書をめぐる同社と静岡県とのやり取りの軌跡と、明治10年代後半における明善の政府高官とのネットワークの具体的位相を明らかにした。

キーワード

金原明善、治水、金禄公債証書、一次史料、明治政府

[Article]

Research on CHIKAKYOURYOKUSHA[治河協力社, Civil Engineering Association], starting from primary historical documents

Tomono, Fumiaki.

Faculty of Arts and Letters, Tohoku University

Abstract

This study attempts to historicize CHIKAKYOURYOKUSHA[治河協力社], association for the flood control of the Tenryu River, founded by Kinpara Meizen (1832-1923) with volunteers in 1874, based on primary historical documents. Until now, there has been no research on the "CHIKAKYOURYOKUSHA" using primary historical documents, except for "Kinpara Meizen"[『金原明善』] by Shintani Kuro published in 1968. In light of these historical issues, this study uses "office documents" as a clue to clarify the trajectory of communication between the company and Shizuoka Prefecture over the

Certificate of Bond Allowance and the specific phases of Meizen's network with government officials in the late 1877s.

Keywords

Kinpara Meizen, Flood control, Certificate of Bond Allowance, Office Documents, Meiji government

【報告】

一橋大学附属図書館ディスカバリーサービス改修事例報告

柴田 育子

(学術情報課雑誌情報係)

尾城 友視

(学術情報課レファレンス係)

一橋大学学術・図書部

1. はじめに

本稿では、図書館ウェブサイトのリニューアルに伴い2019年度に行われたディスカバリーサービスの改修について報告する。改修の経緯や具体的な作業内容のほか、OPACも含めた図書館の検索サービス全体の整理や、運用体制の見直しについても触れる。なお、本稿は2020年6月に行われた株式会社サンメディア主催「第1回学術情報ソリューションセミナー on the Web¹」での事例報告の内容を再構成し、加筆・修正したものである。

2. 改修の経緯

2.1 ディスカバリーサービス導入後の運用状況

一橋大学附属図書館（以下、当館）では、増加する電子リソースの提供環境として、2014年4月にProQuest社のディスカバリーサービス「Summon²」の提供を開始した。Summonの特徴の一つに、電子ジャーナルや電子ブック等の電子リソースや、ウェブ上で利用できるコンテンツ、そして図書館の所蔵資料をまとめて検索できることが挙げられる。しかし、当館で公開した当初は、OPACをはじめとする他のサービスやデータベースとの連携は十分ではなかった。このため、その時点での機能に即して「学術論文検索サービス（仮称）」として公開された。その後、公募による愛称の募集・投票が行われ、8月に既存のOPACの

¹ “第1回学術情報ソリューションセミナー on the Web”. サンメディア.
<https://www.sunmedia.co.jp/e-port/online-support/folder/event/solution-seminar2020.html>, (accessed 2021-02-05).

² “Products - Summon®”. ProQuest. <https://about.proquest.com/products-services/The-Summon-Service.html>, (accessed 2021-01-13).

名称「HERMES」との関連性も感じられる「HERMES-Articles」という愛称が決定した³。2015年1月には、図書館業務システムのリプレイスに伴い、OPACの検索画面上に「世界の論文等」という名称のタブを追加し、このタブからHERMES-Articlesを検索することができるようになった(図1)。同様に、図書館ウェブサイトのトップページに配置した検索ボックスにも、「論文検索」というタブが追加された(図2)⁴。続く3月には、公開時に保留となっていたOPACとの連携が行われ、HERMES-Articlesの検索対象に本や雑誌といった図書館蔵書が含まれることとなった。並行して他のデータベースとの連携も進められ、HERMES-Articlesの検索結果は多様になる一方、少しずつ名称とサービス内容に齟齬が生じていたが、既に定着しつつあった名称の変更には至らなかった。

このように、当館におけるディスカバリーサービスは徐々にアクセスポイントや検索対象となるデータを増やしてきた。しかしこの間、当館の中心となる検索サービスは依然としてOPACであり、ディスカバリーサービスはあくまで論文検索や各種データベースをまとめて検索するための補助的なツールという位置付けに留まっていた。



図1 旧一橋大学蔵書検索 HERMES (OPAC) のトップページ

³ 一橋大学附属図書館。「学術論文検索サービス(仮称)」の愛称が決まりました!。BELL. 2014, (115), p.2, <https://hdl.handle.net/10086/61796>, (accessed 2021-01-13).

⁴ 当時のOPACも図書館のウェブサイトも、ディスカバリーサービスを使って検索するには図中に示している赤枠のタブをはじめにクリックして画面を切り替えてから検索しなくてはならず、利用者には分かりにくかった。



図2 旧一橋大学附属図書館ウェブサイトのトップページ

2.2 図書館ウェブサイトのリニューアル

こうして導入からの5年間は、特に大きな見直しを迫られぬままディスカバリーサービスの運用が続けられたが、2019年度に実施した図書館ウェブサイトの全面的なリニューアルを契機に、ディスカバリーサービスの改修に至ることとなった。

ウェブサイトのリニューアルに際しては、その検討や作業にあたるプロジェクトチーム（以下、PT）が館内に組織された。PTが策定した新ウェブサイトのコンセプトでは、「非来館利用の重視」が挙げられ、このことから「電子リソースにアクセスしやすいウェブサイト」を目指すこととなった。非来館利用者は、自宅や研究室から図書館サービスを利用するため、図書館にある資料よりも電子リソースの利用が中心であると考えたためである。

このコンセプトに基づき、ウェブサイトのトップページには、アクセスしてすぐに資料検索を行うことができるよう、資料の検索ボックスを配置することがPTの方針として当初から合意されていたが、旧ウェブサイト同様にOPACの検索ボックスを最優先として配置すべきか、電子リソースへのアクセスの利便性を優先し、ディスカバリーサービスの検索ボックスを配置すべきかが議論された。

結果を先に述べると、2020年2月3日に公開されたリニューアル後のウェブサイトのトップページには、ディスカバリーサービスの検索ボックスが配置されている（図3）。では、

どのような点がPTで議論されたのか。それは率直に言うならば、「ディスカバリーサービスが使い物になるだろうか」という疑問と、ディスカバリーサービスによってある種の問題解決が図れるのではないかという期待の両者であった。PTで言及されたことをまとめると、次のような内容になる。



図3 リニューアル後の一橋大学附属図書館ウェブサイトトップページ

2.3 課題1：図書館職員のディスカバリーサービスへの理解不足や苦手意識

2014年4月のディスカバリーサービスの運用開始にあたっては、2013年度から「電子的資料の利活用等に関するプロジェクトチーム」が製品比較や導入のための具体的な検討及び初期設定や導入後の広報等を担い、運用開始後、2014年度をもって解散となった。このPTに参加していた職員は、活動を通してディスカバリーサービスや Summon に対して理解を深める機会を得たが、他の職員は必ずしもそうではなく、その後PTメンバーの多くが館外へ異動してしまったことも重なり、ディスカバリーサービスに関する知識が十分に館内で共有・蓄積できなかった。

そして導入時の経緯やディスカバリーサービスの仕組み、こういった外部データベース

と連携しているかをよく知らぬまま HERMES-Articles を試しに使ってみた職員は、次のような経験をすることになる。---「論文検索がウリなのだから」と、任意のキーワードで論文検索を試みるが、論文がまったくヒットせず、図書館の蔵書から図書ばかりがヒットする。絞り込みもできるようだが、項目の意図するところがわからない。あるいは、論文はヒットしたけれど本文にはアクセスできず、リンクリゾルバの画面に飛ばされる。結局、掲載誌の所蔵を調べるために、OPAC に移動している。これなら最初から文献データベースや OPAC を使う方が効率的ではないか。---

つまり、参考調査や ILL 業務で特定の論文の所蔵を確認する場合も、掲載誌を OPAC で探せばよいし、論文を一から探す場合も既知の文献検索データベースを使えばよい。図書館職員にはこうしたツールの使い分けが身に付いているがゆえに、こうした失敗体験やディスカバリーサービスに対する疑問があえて共有されることは少なく、次に述べる課題 2 とも関連し、問題提起に繋がらなかった。結果として、ディスカバリーサービスへの理解不足や苦手意識が解消されない状況が続いてきたものと思われる。

2.4 課題 2：ディスカバリーサービスに対する主体的な関与の欠如

もう一つの課題として、ディスカバリーサービスの担当者が曖昧であったということも挙げられるだろう。導入後も、契約担当係がナレッジベース上でのデータの追加や修正を行っており、電子ジャーナルや電子ブックのデータのメンテナンスは続けられていた。しかし、ディスカバリーサービスそのものについての方針を議論したり、情報共有を行ったりする場はなく、積極的な利用促進も行っていなかったために、課題解決の緊急度や重要度は低く、どこか宙に浮いたサービスとなってしまった。

これが図書館業務システムや OPAC であれば、各係の所掌範囲がより明確で、不具合にすぐ対処する体制や必然性があり、サービスや業務に直結することから職員全員が主体性をもって関与する土壌が既にできている。ディスカバリーサービスに関しても、課題 1 で触れたようなことも含め、個々の職員は疑問や問題意識を持っていたにも関わらず、それらを共有し、改善につなげていく仕組みがないこともその一因であったろう。

2.5 期待

一方で、ここ数年においては、再びディスカバリーサービスへの期待が高まる場面も見られた。その一つが、2017 年度から実施している学部初年次生に特化した図書館ガイダンス

である。学部の授業と連携し、同じ内容のガイダンスを短期間に繰り返し行うものであったため、2017年度から2019年度にかけては、数名のガイダンス担当者だけではなく全館体制で実施した⁵。ガイダンスでは論文の検索や入手方法も扱うが、論文の書誌情報から掲載誌のタイトルを確認し、OPACでその雑誌のタイトルで検索を行うという手順を繰り返し説明する。しかしながら、検索実習では多くの学生が論文タイトルでOPACを検索してしまうケースが頻発していた。

この問題はガイダンス担当者間では以前から共有されていたが、全館体制で実施したことで、多くの職員が学生の検索行動を目の当たりにし、問題意識を館内全体で共有することに繋がった。文献検索に不慣れな利用者にとっては「論文を探しているのに雑誌名で検索する」という行動はなじみにくく、論文は論文単位で検索でき、かつシンプルな手順で本文を入手できることが利用者にとって最善ではないか、といった意見も聞かれた。

加えて、図書館員にとっても、近年電子リソースが増える中で、管理面での大きな期待があった。当館では、これまで電子ジャーナルや電子ブックの書誌データを一つずつ作成し、一括登録を行い、OPACで検索できるようにしていた。このため、OPACを使えば、冊子体資料と電子リソースを意識せずにまとめて検索できるので便利であったが、書誌データの作成・登録を行う作業にはかなりの時間と手間がかかっていた。そのため、トライアルや試読可能な電子ブックのタイトルには到底手が回らなかった。

その一方で、ナレッジベースによる電子ジャーナル、電子ブックの管理も行っており、リンクリゾルバやタイトルリストも提供していた。ナレッジベースでの管理は、管理画面から契約したデータベースないしはパッケージ名を選択するケースが多く、さらにSummonへの連携も可能である。トライアルや試読タイトルも同様に提供できる。ディスカバリーサービスの使いづらさが改善されれば、OPACとナレッジベースでの二重管理を解消できるのではないか、という意見もあった。

このように、図書館ウェブサイトのリニューアルPTにおいて議論が開始された時点では、課題と期待の両者が挙げられていた。課題となっている点を改善できれば、ウェブサイトのトップページにディスカバリーサービスの検索ボックスを置くこともできるだろうと

⁵ 2020年度においては、コロナ禍により対面ガイダンスを実施することができず、動画提供で代替したため、このような実施体制ではなかった。2021年度もガイダンス担当者がオンラインで実施する予定のため、全館体制で実施できたことは貴重な機会となった。

いう結論に至った。そこで、ウェブサイトのリニューアル PT 中のメンバーからさらにディスカバリーサービスの改修を行うメンバーを選出し、新たな PT を立ち上げた。様々な係の立場から検証を行うため、本稿の執筆者である雑誌情報係長及びレファレンス係員の2名と、村井しのぶ電子情報係員（当時）がその任に就くこととなった。

3. 改修の内容

ディスカバリーサービスの改修 PT が念頭に置いたのは、まずは図書館職員にディスカバリーサービスを受け入れてもらうことであった。そのために、ディスカバリーサービスの位置付けを示し、使いづらい部分を改善することを目指した。主な改修点は、次に述べる「コンセプトの見直し」「インターフェースの改善」「外部コンテンツ・サービスとの連携」「OPACとディスカバリーサービスの役割分担」「日本語論文検索動線」である。

3.1 コンセプトの見直し

まず、当館におけるディスカバリーサービスの位置付けを含め、コンセプトの見直しを行った。これまで「論文検索ツール」としての印象付けがなされてきた当館のディスカバリーサービスであったが、より実態に即した形とするため、「一橋大学で利用できる学術情報を広く検索するためのツール」として位置付け直すこととした。これに伴い、「HERMES-Articles」という名称も「HERMES-Search」に変更し、論文に限らず、様々な資料や情報を探すツールであることを表現することを提案した。この意図をより明確にするため、追って作成されたロゴにおいては、「一橋大学学術情報検索」とルビを振っている（図4, 5）。



図4 名称変更前の HERMES-Articles のロゴ



図5 名称変更後の HERMES-Search のロゴ

3.2 インターフェースの改善

続いて、多くの職員が直感的に「使いづらい」と感じていたインターフェースの改善を行った。改修前の画面（図6）の主な問題点として、次のような点が挙げられた。

- ① ヘッダー部分の背景色と文字色のコントラストが弱く、見づらい
- ② 項目名や画面上の説明に、何を意味しているのか分かりづらい箇所がある
- ③ 使用頻度の高いファセットが埋もれていて、直感的に使いづらい

こうした点を、Summon の管理画面から修正していった。Summon には多くの設定項目があり、修正した結果や挙動を一つ一つ確認しながらの作業であった。改修後の画面は図7のとおりである。

画面上の配色は、並行して進められていた図書館ウェブサイトのリニューアル後のデザインに合わせて統一感を出しつつ、可読性を向上させるよう心掛けた。

項目名や画面上の説明に関しては、Summon がもともと英語で作られたサービスであり、それを日本語に翻訳しているため、不自然に感じられる部分や、意味が伝わりづらい部分が散見される。PT メンバーでわかりづらい部分を抜き出して、管理画面でオリジナルの英語表現を確認し、対応する日本語訳の変更を行った。

例を挙げると、画面左側のファセットのうち、図書館の所蔵資料のみ表示させる項目名は、もとの英語表記では「Library Catalog」であり、デフォルトの日本語訳は「図書館カタログ」であった。利用者にとってはわかりづらい表現であると思われたため、当館 OPAC の名称を併記した「図書館蔵書 (HERMES-Catalog)」に変更するなどした。

Summon のファセットには様々な種類があり便利だが、これまで「主題」が上位にあったものを、検索結果から必要な資料に素早く絞り込みを行えるようにするため、「資料タイプ」をより上位に移動させた。

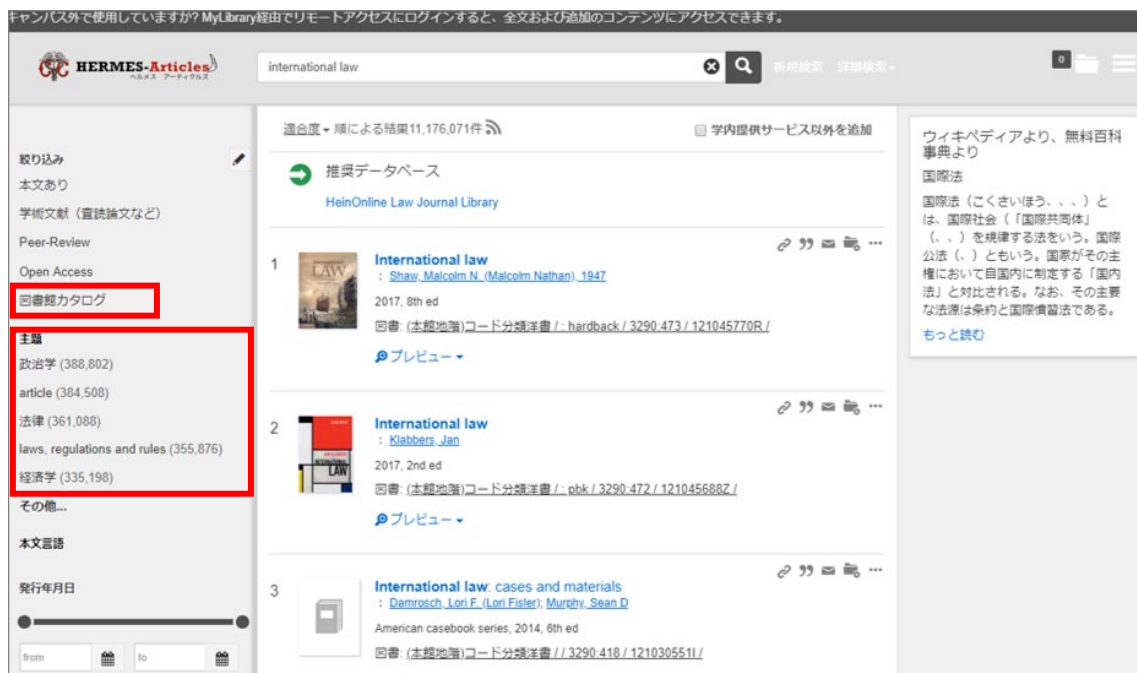


図6 改修前の検索結果画面

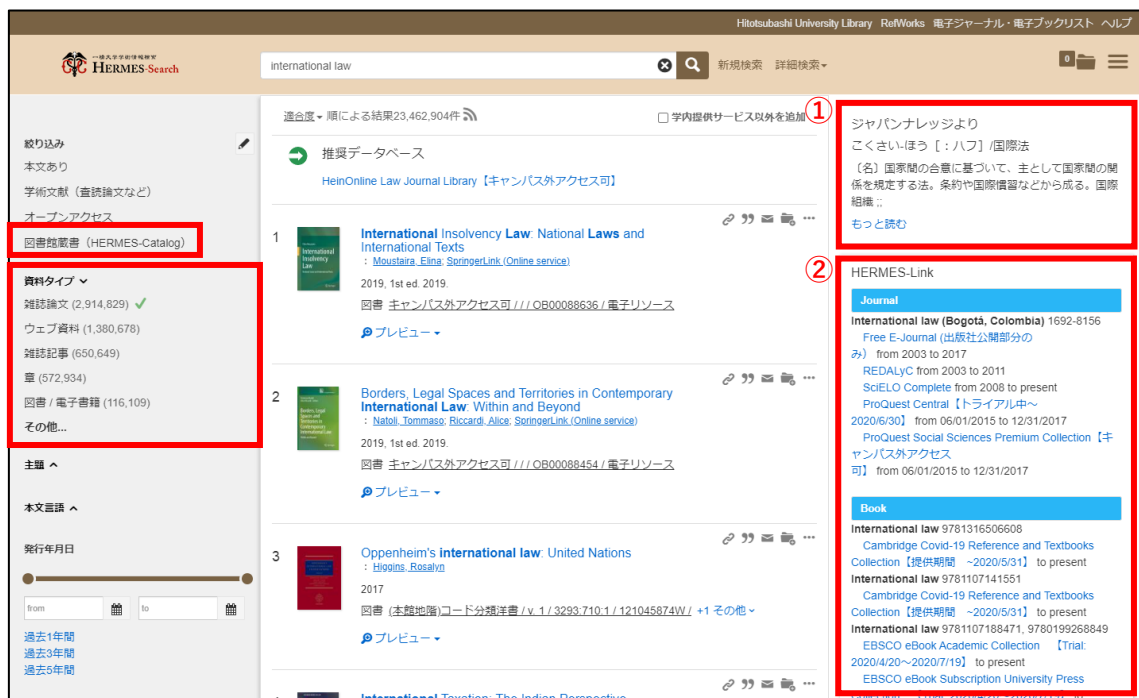


図7 改修後の検索結果画面

3.3 他のサービス・データベースとの連携

Summon では、他のサービスやデータベースと連携し、それらが持つデータを Summon の検索結果に含めるだけでなく、様々な方法で表示させることができる。例えば、検索結果画面の右側はカスタムパネルと呼ばれる領域で、機関ごとに独自に設定した内容を表示させることができる。カスタムパネルの利用方法は多岐にわたるが、当館では、Summon の検索語を引き継いで、連携している各データベースを検索する機能を新たに活用することとした。

最上段のカスタムパネルでは、「ジャパンナレッジ Lib」の検索結果を表示させている（図 7 ①部分）。ジャパンナレッジ Lib は複数の辞事典、叢書、雑誌を横断検索できる機関向けのデータベースだが、検索キーワードの辞書的な意味を表示することで、文献を探すだけでなく、その検索キーワード自体に対する理解を深めてもらうことがねらいである。

上から2番目のカスタムパネルでは、リンクリゾルバ⁶との連携を行った。後述する OPAC との役割分担とも関連するが、Summon は電子ジャーナルのタイトル単位のメタデータを持たないため、当館で冊子体を持たず、電子ジャーナルでしか利用できない雑誌は、タイトルで検索してもヒットしない。利用者が雑誌のタイトルで検索した場合にも、このカスタムパネルが表示されることで利用可能な電子ジャーナルを示すことができる（図 7 ②部分）。

更に下段には、OPAC に検索キーワードを引き継ぐためのカスタムパネルや、図書館からのお知らせを掲載するカスタムパネルを追加した。

3.4 日本語論文検索動線

その他、検討を要したのが日本語論文の検索動線についてである。当館では、ウェブ上で本文が公開されていない日本語論文に関しても、冊子の所蔵や ILL により比較的容易に本文を入手できると考えられるため、ディスカバリーサービスの検索対象にしたいと考えていた。

Summon では、CiNii Articles や J-STAGE をはじめとするデータベースと連携することで、日本語論文の検索が可能である。当初、CiNii Articles との連携により日本語論文のほぼ全体をカバーできると考えていたが、実際に検索を行うと、ヒットしない論文が数多くあった。調べてみると、CiNii Articles から Summon に提供されるデータは、2017 年 4 月以

⁶ 当館では Summon と同じく ProQuest 社が提供する 360Link を導入している。

降更新されていない⁷ということがわかり、日本語論文の検索動線を改めて考えなおす必要が出てきた。検討の結果、新たに国立国会図書館雑誌記事索引（以下、雑誌記事索引）と連携することで問題は解決するかと思われたが、ここで問題となったのが検索結果から本文入手に至るプロセスである。

Summon 上でヒットした雑誌記事索引由来の検索結果は、論文のタイトルをクリックすると、国立国会図書館サーチの検索結果に遷移する。そこから本文を入手するには、画面中の「見る・借りる」欄から国立国会図書館オンラインか CiNii Books に飛ぶことができる。国立国会図書館オンラインからは、国立国会図書館の遠隔複写サービスの申込みに進むことができるが、通常の雑誌論文であれば、大学図書館同士の ILL を利用する方が適切である。では、CiNii Books から大学図書館の所蔵状況を確認しようと考えリンクをクリックすると、論文のタイトルで CiNii Books が検索されてしまい、当然論文の掲載誌の所蔵情報はヒットせず、入手プロセスがここで途絶えてしまう。

この状況を代理店である株式会社サンメディアに相談したところ、Summon 上での雑誌記事索引の検索結果は、国立国会図書館サーチではなく、リンクリゾルバによる中間画面（図8）に遷移させる提案を受けた。

探している論文

プラスチックリサイクルの現状とSDGsが目指す社会におけるプラスチックの使い方

著者： 徳, 加茂

ジャーナル： 工業材料 = Engineering materials

ISSN： 0452-2834

日付： 2020/10/01

巻： 68 号： 10 ページ： 20-25

本学で利用可能な電子リソースからは本文が見つかりませんでした。

- ・論文によってはオープンアクセス版が公開されている場合があります。[こちら](#)にて、論文名やDOIで検索ください。
- ・あるいは、以下の方法で探してみてください。

ウェブで本文が見つからない場合は

Step 1. 一橋大学の所蔵を探す

蔵書検索 HERMES-Catalog

図書や雑誌のタイトルで検索

ISSN/ISBNで検索

Step 2. 図書館に文献の取寄せを依頼する（有料）

文献複写

申し込み

参考：その他の情報源から探す

Cinii Books

図書や雑誌のタイトルで検索

ISSN/ISBNで検索

Cinii Articles

論文名で検索

第一著者名で検索

Google Scholar

論文名で検索

第一著者名で検索

Web of Science

雑誌タイトルで検索

第一著者名で検索

図8 リンクリゾルバによる中間画面の例

⁷ CiNii Articles が Summon に提供していたメタデータは、2017 年 3 月に終了した国立情報学研究所電子図書館事業（NII-ELS）の対象となる論文データであったためである。

これにより、国立国会図書館サーチに飛ばすことなく、学内や他大学の所蔵の確認や、ILLの申込みに誘導できるようになった（図9）。このように、Summon では連携したデータベースごとに遷移先を変更することもできる。

こうして、J-STAGE や機関リポジトリ等によりウェブ上で本文が公開されている論文に加え、冊子でしか入手できない日本語論文の検索も HERMES-Search で行うことができるようになった。

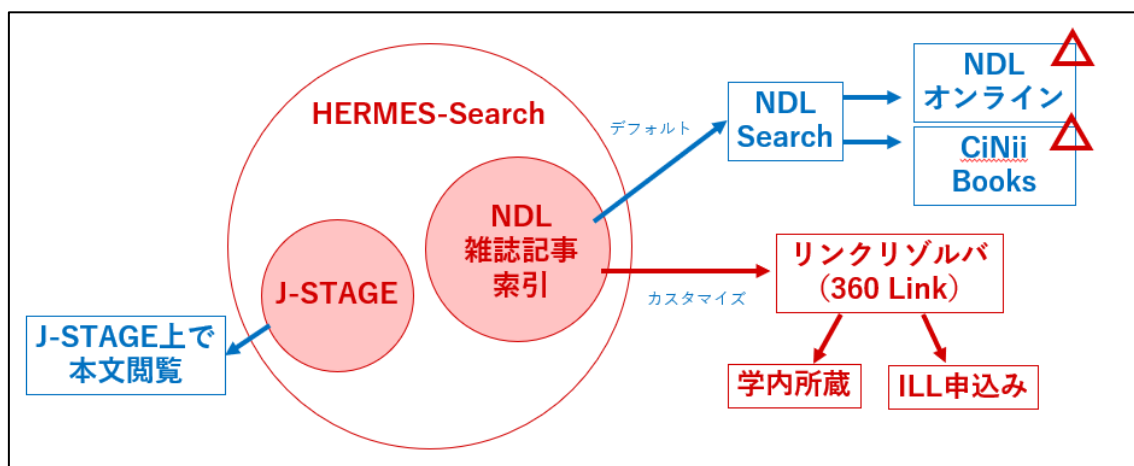


図9 日本語論文の検索動線イメージ

4. OPAC とディスカバリーサービスの役割分担

以上、コンセプトや名称の変更に始まり、様々な改修を行うことで、これまで半ば放置されていたディスカバリーサービスを整備することができた。この結果を受けて、図書館ウェブサイトのリニューアルに際しては、OPAC ではなくディスカバリーサービスの検索ボックスをトップページに据えることが了承された。同時に、これまで OPAC が担ってきた電子リソースの提供機能を見直すことが可能となった。

既に述べたとおり、当館では、ナレッジベースの管理によってリンクリゾルバやタイトルリストで電子リソースを提供するほか、OPAC にも電子ブックや電子ジャーナルの書誌を個別に作成し、検索できるようにしていた。この二重管理は長らく業務上の負担であったが、今回の改修を機に、電子ジャーナルに関しては OPAC への書誌登録を中止し、これまでに登録した電子ジャーナルの書誌は削除することにした。これは、ディスカバリーサービスにおいて電子ジャーナルに収録されている論文単位での検索が可能であること、既に述べたリンクリゾルバとの連携により電子ジャーナルのタイトル検索にもある程度対応できるよ

うになったことで、これまで OPAC が担ってきた電子ジャーナル検索機能を代替できると判断したためである。

一方で電子ブックに関しては、出版社からナレッジベースへ十分なメタデータが提供されておらず、ナレッジベースの管理のみで満足いく検索結果を得ることは難しいと判断した。特に新刊タイトルを購入した際に、まだナレッジベースに書誌がなく、登録できないケースも多くあり、この問題は自館で即時解決できるものではないと判断した。そのため電子ブックはナレッジベースでの管理に加え、引き続き OPAC に個別の書誌を作成し、OPAC とのデータ連携によってディスカバリーサービスでの検索を可能にする方法を採用している。

このように OPAC から電子ジャーナルの書誌が削除されることにより、OPAC の電子リソースの提供機能が一部縮小され、ディスカバリーサービスの機能が強化されることで、当館の検索システム全体のバランスにも変化が生じた。これまでは OPAC が中心的な検索ツールであったところ、その比重がディスカバリーサービスに大きく移ることになったのである。しかしながら、これまでは「図書館の資料を調べるなら HERMES (OPAC) で」というのが教員・学生も含めたお約束であった。その認識を「一橋大学で利用可能な資料を調べるなら HERMES-Search」へ変える必要があった。

ここで PT メンバーは、長らく親しまれてきた OPAC の名称「HERMES」を思い切って変更することを提案した。HERMES-Search の旧名称は HERMES-Articles であったが、当館では他にも、機関リポジトリに「HERMES-IR」、リンクリゾルバに「HERMES-Link」といったように、これらが HERMES から派生したサービスであるかのように名称を付けてきた。このイメージを、並列なものに変えたいと考えたのである。具体的には、HERMES を OPAC 固有の名称とするのではなく、当館の検索サービス全般の概念と捉え、OPAC の名称を「HERMES-Catalog」と変更することを提案した。この名称変更による各サービスの関係性の変化を簡易的に図示したのが図 10 である。

この提案が了承され、OPAC とディスカバリーサービスの役割分担だけでなく、附属図書館が提供する検索サービス全般の整理を行うことができた。

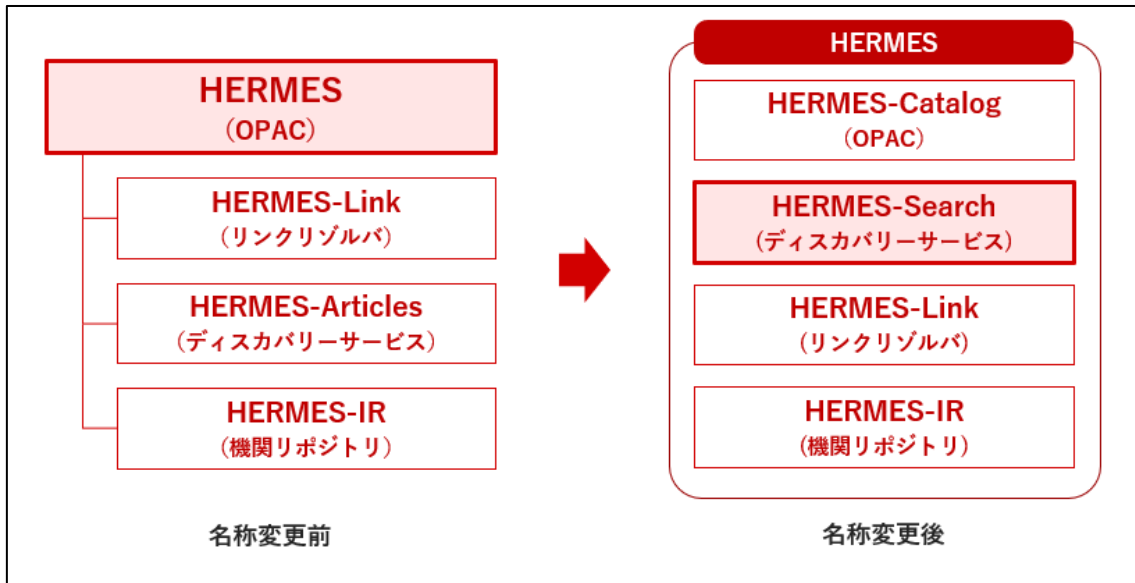


図10 OPAC 名称変更前後のサービス関係図

5. 運用体制の見直し

ここまで述べてきたディスカバリーサービスの改修や、それに派生した OPAC の運用変更に関しては、PT メンバーを中心に進めてきた。この過程を通じて PT メンバーは、ディスカバリーサービス導入時の PT メンバーと同様、ディスカバリーサービスや Summon に対する理解を深め、苦手意識をかなり減ずることができたように思う。しかしながら、今後も Summon のアップデートや不具合への対応といった日常的な業務に始まり、その時々状況に応じてディスカバリーサービスの運用を継続していくためには、館内全体で取り組む体制が必要である。冒頭で課題として挙げたように、再び主体性の欠けた運用を繰り返さないためにも、新たな運用体制の提案を行った。

まずはディスカバリーサービスに関する係ごとの業務分担を明確にした。PT メンバーに業務が属人化することを避け、係の業務の中にディスカバリーサービス対応を位置付けることがねらいである。

同時に、所掌範囲を超えてディスカバリーサービスや Summon 全般に対する理解を深め、より身近なものと感じられるような仕組みも考えた。小さなことではあるが、日常的に発生するディスカバリーサービスの話は、電子リソースに関する情報共有を行うための館内のメーリングリストでやり取りをし、さらに、年に2回程度定例会を開催することとした。

定例会では、一つの係では解決しづらい課題や、アップデートの検討など影響範囲の大き

い話題を扱うこととした。また、利用状況の分析も行いながら今後の改修や機能追加、新規カスタマイズを検討する場とし、その過程で出てきた疑問や問題を共有した上で、後日代理店にまとめて問い合わせ、より製品への知識を深めていくこととした。

6. 改修後の状況と今後の課題

以上のような改修を経て、2020年2月に新しい図書館ウェブサイトと同時に「HERMES-Search」として提供を開始したディスカバリーサービスだが、この1年で利用状況は大きく変化した。図11は、HERMES-Searchでの検索数や絞り込みの回数のグラフである。2020年2月以降、大幅に利用が増えていることがわかる。

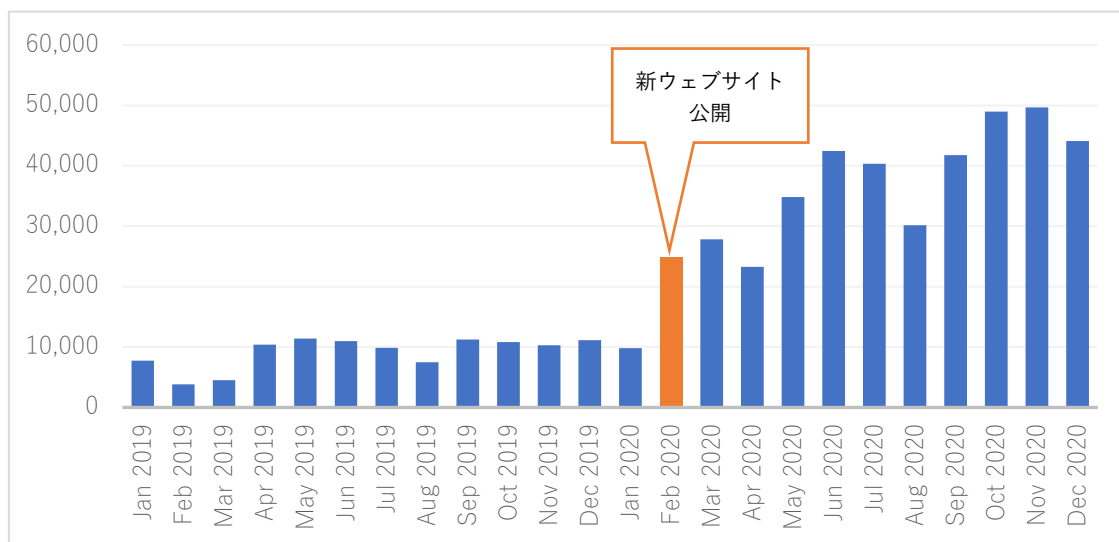


図11 HERMES-Searchの検索数や絞り込みの回数

ウェブサイトのトップページに検索ボックスを配置したので、利用が伸びることは当然予想していたが、リニューアル前に比べると倍増している。例年2月は在学生の学習・研究が一段落する時期でもあるにもかかわらず、これは期待以上であった。2020年4月にはやや利用が落ち込むが、5月以降は順調に増加傾向にある。この増減には、2020年2月以降に国内でも感染が広がった新型コロナウイルス感染症の流行状況も影響していると思われる。

一橋大学（以下、本学）では、新型コロナウイルスの流行拡大を受け、当初は一部の授業を除いて、予定どおり2020年4月6日から春夏学期の授業を開始する予定であったが、2020年3月30日に、春夏学期の全ての授業をオンラインで実施し、授業開始日を2020年

5月7日に延期することが決定した⁸。4月10日以降、本学の学生・教職員に対しても不要不急の入構は行わないよう通知され、教職員は在宅勤務が原則となり、当館も4月10日から臨時休館となった。例年4月に行っていた新入生向けの図書館ガイダンスも当然中止された。4月にディスカバリーサービスの利用がやや落ち込んだのは、こうした事態を受けてのものであったと思われる。

この間、図書館職員は5月の授業開始に向けて、学外から利用できる電子リソースの急拡充にはじまり、その周知や、リモートアクセスを前提としたガイダンス動画の作成など、教員や学生が資料にアクセスできるような体制作りに追われた。図書館業務システムは自宅から利用することができなかったが、Summonの管理サイトは自宅からでもアクセス可能で、新たに利用可能となった電子リソースをディスカバリーサービスで検索できるようにするといった作業は、在宅勤務下においても可能であった。5月以降、ディスカバリーサービスの利用数が再び増加に転じたことは、それらの取り組みの一つの成果であったといえるだろう。

当館の臨時休館は2020年9月13日まで続き、その間、学内者に対しては限定的な来館サービスを実施してきたが、例年に比べて利用者の来館機会は大きく減少した。しかしこのような状況下で電子リソースの利用頻度が高まったと考えられ、奇しくもすべての利用者が、新しいウェブサイトの「非来館利用重視」というコンセプトに合致する形で図書館のサービスを利用することとなったのである。こうした事態を予想していたわけではもちろんなかったが、新しいウェブサイトのコンセプトと、それに基づいたディスカバリーサービスの整備により、電子リソースにアクセスしやすい環境を作っておいたことが、コロナ禍においてある程度功を奏したのではないかと考えている。

このような状況だったからこそ、新たな課題もはっきりと見えてきた。せっかくトップページに配置したディスカバリーサービスの検索ボックスであるが、学外から検索すると、電子リソースの一部が検索結果に表示されないのである。電子リソースは、通常学内のIPアドレスで認証を行いアクセス可能となるため、当然学外からはアクセスできない。こうした学外からアクセスできない電子リソースが、ディスカバリーサービスの検索結果からは除外されてしまうのである。ただし、本学では一部の電子リソースへのリモートアクセスを

⁸ 一橋大学. (学生の皆さんへ) 2020年度・春夏学期の授業について (3月30日更新). https://www.hit-u.ac.jp/students_info/7382, (accessed 2021-02-16).

EZproxyにより実現しており、これらの電子リソースは、学外から検索した場合でも表示させたい。このためには、トップページの検索ボックスを使わず、HERMES-Search自体に別途リモートアクセスする必要がある。この手順は、ガイダンス等で利用者に案内しているが、おそらく気が付かないままトップページの検索ボックスを使っている利用者もいることが予想される。トップページの検索ボックスをリモートアクセス対応させる方法については、目下検討を進めている。

7. 最後に

今回の改修を振り返ってみると、既存のサービスを手直しすることに留まらず、サービスのコンセプトや利用目的を問い直すことで、それに合わせて機能追加やカスタマイズを選択するということが上手くできたように思える。

また、職員のディスカバリーサービスへの苦手意識の払拭も視野に入れ、運用を継続するための体制づくりにも着手できたことは一つの成果と言えるだろう。本改修の“キモ”は、何より「職員にディスカバリーサービスを受け入れてもらうこと」であったといっても過言ではない。

今後は、利用に関する分析や評価を行いつつ、運用体制を継続し、利用者と図書館員の双方にとってより良いサービスを目指していきたいと考える。

[Report]

A case report on the improvement of discovery service at Hitotsubashi University Library
Shibata, Yasuko.

Serials Section, Academic Services Division, Department of Library Affairs, Hitotsubashi University
Ojiro, Tomomi.

Reference Service Section, Academic Services Division, Department of Library Affairs,
Hitotsubashi University

【報告】

学部カリキュラムにおける図書館ガイダンスのマッピング：ALPS 履修証明プログラム成果報告

寺島 久美子

(学術情報課レファレンス係)

一橋大学 学術・図書館部

1. はじめに

筆者は 2019・2020 年度にかけ、千葉大学主催の「アカデミック・リンク教育・学修支援専門職養成履修証明プログラム」(ALPS 履修証明プログラム)を個人的に受講した。その一環である個人研究のテーマとして、勤務先の一橋大学附属図書館における情報の探し方ガイダンスを取り上げ、考察と改善を行った。以下、その成果を報告する。

一橋大学附属図書館(以下、当館)では、情報リテラシー教育支援として、情報の探し方に関するガイダンスを実施している。レファレンス係および館内有志のメンバーからなる情報リテラシー教育ワーキンググループ¹が主体となり、初歩的な図書館の使い方から専門的なデータベースの検索方法まで、年間 10 種類以上の図書館ガイダンスを開催している。2020 年度はコロナウイルス感染拡大防止のため、対面に代えてオンラインガイダンス(動画の提供や Web 会議システムによるライブ配信)を実施する等、注力して取り組んでいる。

一方で、「必要な人に必要なガイダンスを届けられているか」という観点からは改善の余地がある。第一に、ガイダンスの学部教育における位置づけが不明確で、教員や学生のニーズに合ったガイダンスができていないか、十分に検証できていないと言えない。第二に、ガイダンスで何を行ってどんな能力が身に付くのか、図書館の側からも明確に示せてはいない。第三に、ガイダンスの広報としてウェブサイトでのお知らせやポスターの掲示を行っているが、教員や学生の認知度は十分とは言えない。こうした問題点から、教員や学生から見て図書館ガイダンスは「自分には関係ない」「受けても／受けさせても役に立つかわからない」

¹ 2020 年度現在の情報リテラシー教育ワーキンググループのメンバーは、レファレンス係 3 名(筆者含む)および利用者サービス係、電子情報係、図書情報係、目録情報係から各 1 名ずつの計 7 名である。

「やっていることを知らなかった」といった印象を持たれているのではないかと、という懸念があった。

2. 研究目的

こうした図書館ガイダンスの現状から、学生や教員から見て「自分は／自分の学生はこのガイダンスを受ければいいんだ」「こんな能力が身に付くなら受講したい」と思ってもらえるように改善したいという問題意識を持った。そこで、学部カリキュラムにおける図書館ガイダンスの位置づけを示し、ガイダンス受講によってどのような能力が身に付くのかも示し、位置づけと能力を分かりやすい形にまとめて広報に生かすことを個人研究の目的とした。

3. 研究枠組みと方法

学部教育での図書館ガイダンスの位置付けと、図書館ガイダンスで身に付く能力を示すために、以下の研究枠組みを設定した。第一に、各学部のディプロマポリシー、カリキュラムポリシー、アドミッションポリシーを分析し、カリキュラムマップの形に整理した。第二に、図書館ガイダンスでどのような能力が身に付くのかリストアップした。第三に、個々の図書館ガイダンスをカリキュラムマップに位置づけるマッピングを行った。最後に、マッピングの整合性が取れているかをチェックした。以下、個々の方法を詳述する。

3.1 ポリシー分析とカリキュラムマップ作成

一橋大学には図式化された公式のカリキュラムマップはまだないため、各学部のディプロマポリシー、カリキュラムポリシー、アドミッションポリシー²を分析して、簡易なカリキュラムマップを作成することとした。三つのポリシーに加え、大学の入学案内や履修ガイ

² 一橋大学の各学部のカリキュラムポリシー等は以下のウェブサイトで公開されている。

- “商学部のポリシー”. 一橋大学商学部. <https://www.cm.hit-u.ac.jp/about/diploma/>, (参照 2021-02-04).
- “研究科のポリシー”. 一橋大学大学院経済学研究科・経済学部. <https://www.econ.hit-u.ac.jp/jpn/page/introduction/policy.html>, (参照 2021-02-04).
- “カリキュラム”. 一橋大学大学院法学研究科 法学部. <https://www.law.hit-u.ac.jp/faculty/curriculum/>, (参照 2021-02-04).
- “社会学部カリキュラムポリシー（教育課程編成・実施の方針）”. 一橋大学 大学院社会学研究科・社会学部. <https://www.soc.hit-u.ac.jp/overview/fss/carriculum.html>, (参照 2021-02-04).

ドブック等も参考資料として確認し、それらから要素を抽出して、カリキュラムマップの形に整理した。個々の科目詳細よりもカリキュラム全体の構造や目的が一覧できることを重視して作成し、作成したものが合っているか教員にチェックを受けた。カリキュラムマップの作成例（一橋大学商学部）を図1に示す。

アドミッションポリシー		社会全般に対して高い関心を有していること		外国語によるコミュニケーション能力	
カリキュラムポリシー		ゼミナール	専門科目	コミュニケーション能力	
	1年次	[導入ゼミ] 「読み・書き・考える」基礎	[基礎レベル] 商学部生が有すべき基本的知識	[全学的な教育プログラム] 基礎となる英語コミュニケーション能力を高める	
	2年次	[前期ゼミ] 商学・経営学に関する英語の専門書を読むための基礎的な能力	[中級レベル] 商学部生が学ぶべき専門知識	[商学部独自の教育プログラム] 英語コミュニケーション能力を更に高める 協定校との間での交換留学の機会	
	3年次	[後期ゼミ] 選択した専門に関わる高度な能力	[応用レベル] 自らの関心にあった領域を深く学ぶ	[汎用スカラープログラム] 英語での専門科目海外留学や海外インターン	
	4年次		[大学院との共修科目] さらに高度な専門知識		
	成果	ビジネスの問題への関心・理解を深める 解決策を導くための思考力・発想力 高い倫理性・高潔な精神	段階的な知識修得 専門領域に関する学習の基盤を形成	グローバル・ビジネスリーダーが備えるべき資質や能力の習得	
ディプロマポリシー		強い実践志向 (問題解決へ向け、知識を総動員できること)		高い国際性 (言語や文化の相違にかかわらず自らの能力を発揮できること)	

図1 カリキュラムマップの作成例（一橋大学商学部）

3.2 図書館ガイダンスで身に付く能力のリストアップ

図書館ガイダンスで身に付く能力のリストアップでは、これまでの図書館ガイダンスで何を行ってきたか、改めて整理した。これまで様々な要望に応じてガイダンスを増やしていった結果、そもそもの目的は何で、誰に受けてほしいのか、ということが不明確になってしまった面があった。そのため「このガイダンスでは誰に向けて何のために何をするのか」ということを整理し直した。その際、受講した学生が「何ができるようになるのか」言語化することを心掛けた。特に、図書館側が「教えたこと」よりも、学生が「できるようになったら嬉しい」こと、教員が「学生にできてほしい」ことを意識した。リストの抜粋を図2に示す。

ガイダンス・サービス名		内容(教えてもらえること)	能力・スキル(できるようになること)
オンデマンドガイダンス (初級)	図書館を利用する	図書館資料や施設の利用方法	必要な資料を自分で探して借りたり、予約やキャンパス間取寄せで資料を優先的に利用したり、館内の設備(PCやプリンター等)を活用したりできるようになる。
	図書館のwebサービスを利用する	図書館ポータル「MyLibrary」の利用方法	本をウェブで予約したり、自宅から電子リソースにアクセスして論文を読んだりできるようになる。
	図書・雑誌を探す	図書と雑誌の探し方、入手する方法	探したい図書やテーマが漠然としていて決まっていなくても、日本語、英語共に的確なキーワードで情報検索できるようになる。
	論文を探す	論文の検索・絞り込み方法と、本文がオンラインにある場合とない場合の探し方	論文を効果的に検索し、オンラインまたは冊子体で入手できるようになる。
リサーチ・スキルズ		上記4つのガイダンスを導入ゼミ受講者(学部1年生)向けに再構成したもの。	
アカデミック・スキルズ図書展示		大学での学びに必要なスキルや能力(調べる・読む・書く・発表する)に関する図書の紹介	大学の学びに必要なスキルや能力を習得し、授業や課題に取り組む下地を作る。

図2 図書館ガイダンスで身に付く能力のリスト(抜粋)

3.3 マッピング

次に、カリキュラムマップに図書館ガイダンスを位置づけるマッピングを行った。マッピングは、ガイダンスの内容を見ながら、学部に適するものを置く、というアプローチと、各学部の特性を見ながら、ガイダンスを位置づけるというアプローチの両面から行った。まずガイダンスの内容および「受講してできるようになること」を考慮し、初歩的なものを1～2年次へ、応用的なものを3～4年次へとおおまかに位置づけた。その上で各学部のカリキュラムの目的を確認し、その目的とガイダンス内容が最も合致するように配置し直した。これらは後ほど、実際のマッピング例を示しながら詳述する。

3.4 整合性チェック

最後に整合性チェックとして、商学部の教員へのインタビューを行い、カリキュラム分析は合っているか、カリキュラム分析とガイダンスマッピングの整合性は取れているか、ガイダンスによって「確かにその能力が付きそうだ」と思えるか、をインタビューした。

4. 結果(成果物)

4.1 学部カリキュラムマップへの図書館ガイダンスのマッピング

これらを行った結果、成果物としてカリキュラムマップにガイダンスを位置づけた配置図が完成した。具体例として、商学部カリキュラムマップへの図書館ガイダンスのマッピングを図3に示す。

アドミッションポリシー		社会全般に対して高い関心を有していること		外国語によるコミュニケーション能力	
カリキュラムポリシー		ゼミナール	専門科目	コミュニケーション能力	
	1年次	[導入ゼミ] 「読み・書き・考える」基礎 ②リサーチ・スキルズ ④新入生向け図書館ガイダンス	[基礎レベル] 商学部生が有すべき基本的知識 ①オンデマンドガイダンス(基本) ・図書館を利用する ・図書館のwebサービスを利用する ・図書・雑誌を探す ・論文を探す	[全学的な教育プログラム] 基礎となる英語コミュニケーション能力を高める ③「アカデミック・スキルズ」図書展示・ブックリスト配布	
	2年次	[前期ゼミ] 商学・経営学に関する英語の専門書を読むための基礎的な能力 ⑤オンデマンドガイダンス(中級) ・新聞記事を探す ・一橋大学以外の資料を探す ・英語論文の検索と入手 ・Google Scholarで文献を探す	[中級レベル] 商学部生が学ぶべき専門知識	[商学部独自の教育プログラム] 英語コミュニケーション能力を更に高める 協定校との間での交換留学の機会 ⑩英語論文の書き方ガイダンス ・留学する人 ・英語で論文を書く人	
	3年次	[後期ゼミ] 選択した専門に関わる高度な能力 ⑨データベースガイダンス ・東洋経済(企業情報) ・eol(財務情報)等	[応用レベル] 自らの関心にあった領域を深く学ぶ ⑧ブックトーク ・一橋大学教員の著書 ・アジア経済研究所教員の著書	[英語論文の書き方ガイダンス] ・留学する人 ・英語で論文を書く人 [汎用スキルプログラム] 英語での専門科目海外留学や海外インターン	
	4年次	⑤オンデマンドガイダンス(上級) ・卒業論文を探す ・海外経済学文献の調べ方 ・国内企業情報の調べ方 ・日本／海外の統計を調べる	[大学院との共通科目] さらに高度な専門知識	⑪英語論文投稿・出版ワークショップ	
	成果	ビジネスの問題への関心・理解を深める 解決策を導くための思考力・発想力 高い倫理性・高潔な精神	段階的な知識修得 専門領域に関する学習の基盤を形成	グローバル・ビジネスリーダーが備えるべき資質や能力の習得	
ディプロマポリシー		強い実践志向 (問題解決へ向け、知識を総動員できること)		高い国際性 (言語や文化の相違にかかわらず自らの能力を発揮できること)	

図3 商学部カリキュラムマップへの図書館ガイダンスのマッピング例

マッピングでは、学生に対面またはオンラインで説明する形のガイダンスを黄色、それ以外の図書館サービス（図書の展示やイベント等）を灰色で示した。商学部独自の配置となった例として「英語論文の書き方ガイダンス」が挙げられる。このガイダンスは英語エリア教員との共催により、人文・社会系の研究論文を英語で書くための基礎を学ぶものである。ターゲットには英語で論文を書く学生や、留学を考えている学生を想定している。やや高度な内容のため、当初は3～4年次に位置づけていた。しかし商学部では独自の留学プログラムを用意するなどして留学に力を入れているため、早い段階から留学を考える学生もいることを考慮し、「英語論文の書き方ガイダンス」を2～3年次に配置し直した。

また、学部によって最適な内容が異なる例として「データベースガイダンス」が挙げられる。商学部は企業情報や財務情報を調べる機会が多いと考えられるため、特に企業情報データベースを打ち出している。

次に、法学部カリキュラムマップへの図書館ガイダンスのマッピングを図4に示す。法学部独自に配置したガイダンスの例としては、法学部1・2年生に特化した内容のワークショップ「法学科目の答案を書くために」が挙げられる。これは法学部との共催により、法学

試験の答案の書き方や学習のノウハウを法学部教員が解説するものである。初めて法学の試験を受ける法学部1・2年生をおもな受講者として想定しているため、1・2年次に配置した。また「データベースガイダンス」も学部によって最適な内容が異なっており、法学部では法令・判例の調査や網羅的な文献検索が求められるため、法律情報データベースや文献情報データベースを配置している。

アドミッションポリシー		社会問題への関心	論理的思考能力	言語能力
カリキュラムポリシー		各専門領域(基礎法、公法、国際法、民事法、企業法経済法、刑事法、法言語論、グローバル・ネットワーク論部門)から導入科目・基礎科目・発展科目に分類されて提示		
カリキュラムポリシー	前期課程	[導入科目]、[基礎科目]を先行履修 法学・国際関係の基礎能力を涵養する科目		
	1年次	②リサーチ・スキルズ	①オンデマンドガイダンス(初級) ・図書館を利用する ・図書館のwebサービスを利用する ・図書・雑誌を探す ・論文を探す	
	2年次	③「アカデミック・スキルズ」 図書展示・ブックリスト配布	④新入生向け 図書館ガイダンス	⑩ワークショップ:法学科目の答案を書くために ・法学科目の試験を受ける人 (法学部生対象、他学部生・大学院生も可)
	後期課程	⑤オンデマンドガイダンス(中級) ・新聞記事を探す ・一橋大学以外の資料を探す ・英語論文の検索と入手 ・Google Scholarで文献を探す		⑧ブックトーク ・一橋大学教員の著書 ・アジア経済研究所教員の著書
	3年次	ゼミナール		[発展科目]
	4年次	⑤オンデマンドガイダンス(上級) ・卒業論文を探す ・国内企業情報の調べ方 ・国内判例の調べ方 ・海外経済学文献の調べ方		⑨データベースガイダンス ・Web of Science(文献情報) ・Westlaw(法律情報) 等
		⑪英語論文投稿・出版ワークショップ		⑩英語論文の書き方ガイダンス ・留学する人 ・英語で論文を書く人
ディプロマポリシー		多様な問題への幅広い関心と高い知見	利害・意見の対立を多角的かつ論理的に分析する能力	公正で衡平な解決策を主体的に構想

図4 法学部カリキュラムマップへの図書館ガイダンスのマッピング例

4.2 図書館ガイダンスの広報物

また、作成したマッピングを踏まえて、ガイダンスの広報物も作成した。具体的には、教員の要望に応じて内容を組み立てる「オンデマンドガイダンス」を、教員に案内するチラシを作成した(図5)。これまでもオンデマンドガイダンスのチラシは作成していたが、ガイダンスの概要と申込方法の紹介にとどまっており、ガイダンスで何をしてどんな能力が身につくのか伝えきれていなかった面があった。そこで今回はチラシを表・裏の両面に変更し、

チラシの表（図5）ではオンデマンドガイダンスの概要と申込方法を、裏（図6）では教員のニーズに対応したガイダンス内容の組合せ例を示す構成とした。表面中央では「何ができるようになる？」と題し、オンデマンドガイダンスを受講することで身に付く能力を、教員と学生それぞれの立場から書き出した。これは図書館ガイダンスで身に付く能力のリストアップを行い、受講によって「何ができるようになるのか」言語化した結果をチラシに反映したものである。

チラシ裏面のガイダンス内容の組合せ例では、教員が学生に抱くと思われるニーズ（○○できるようにしてほしい、という茶色の吹き出し部分）に対し、その能力の習得に役立つガイダンスの組合せをパッケージとして提案する、という形をとった。ニーズは各学部のカリキュラムマップ作成を通じて見えてきた「学生に求められていること」の一部を言語化したものであり、そのニーズに対応するガイダンスの組合せ（パッケージ）例をマッピングに基づいて示している。

このチラシを2020年9月に一橋大学附属図書館ウェブサイト³に掲載し、教員に秋冬学期のオンデマンドガイダンスについて広報を行った。このチラシによって、教員がどのガイダンス内容を選べばよいか分かりやすくなり、申込や相談がしやすくなることを目指している。オンデマンドガイダンス用チラシの作成・配布によって、学部カリキュラムにおける図書館ガイダンスの位置づけを示し、ガイダンス受講によってどのような能力が身に付くのかも示し、位置づけと能力を分かりやすい形にまとめて広報に生かすという目的をある程度実現することができた。

³ “オンデマンドガイダンス”. 一橋大学附属図書館.
<https://www.lib.hit-u.ac.jp/retrieval/seminar/on-demand/>, (参照 2021-02-04).

オンライン授業をサポート

オンデマンドガイダンスをご活用ください！

オンデマンドガイダンスとは、授業やゼミ単位でコンテンツを自由に組み合わせる申込み、オンデマンドのガイダンスです。受講者のレベルや知りたい内容に合わせ、図書館がコンテンツをカスタマイズします。コンテンツは**動画ファイル**または**ライブ配信**で提供いたしますので、是非ご活用ください。

ガイダンス期間：

秋・冬学期授業期間および集中講義期間

ガイダンス方法：

動画ファイル（スライド+音声付き録画）を提供します。Google Classroom等により参加者にファイルを共有し、ご利用ください。

Zoom等によるライブ配信も可能です（10/19以降）。

所要時間：

1コンテンツ=15分から、ご希望のコンテンツを選択し、**組み合わせが可能**です。

申込方法：

以下URLのフォームからお申込みください。折り返しメールにてご連絡します。

お申込みから動画提供まで、**2週間程度**を要します。申込状況によっては更にお時間をいただく場合もありますので、ご了承ください。

✓ 2020オンデマンドガイダンス申込フォーム：

<https://www.lib.hit-u.ac.jp/retrieval/seminar/on-demand/>

何ができるようになる？

2019年度は17のゼミ・授業で実施。好評をいただきました！

学生が...

- ・ 調査テーマに関する先行事例の調査ができるようになる
- ・ 課題の解決に適した信頼性の高い情報源を利用できるようになる
- ・ 課題に応じて適切なメディア（図書・雑誌・インターネット等）を選択できる
- ・ データベースを適切に検索し、必要な情報・資料を検索できる

教員が...

- ・ 指導内容に合ったコンテンツを選び組み合わせることで、研究分野に合ったガイダンスが可能。
- ・ 文献入手の方法や、図書館の利用方法を教員から説明しなくても、**学生の研究（課題）**テーマに応じた調査スキル・知識が身につく、ガイダンス以降のゼミで、教員はより内容に踏み込んだ指導が可能となる。

オンデマンドガイダンスのコンテンツ紹介は、次のページ👉

ガイダンスのレベルと目的

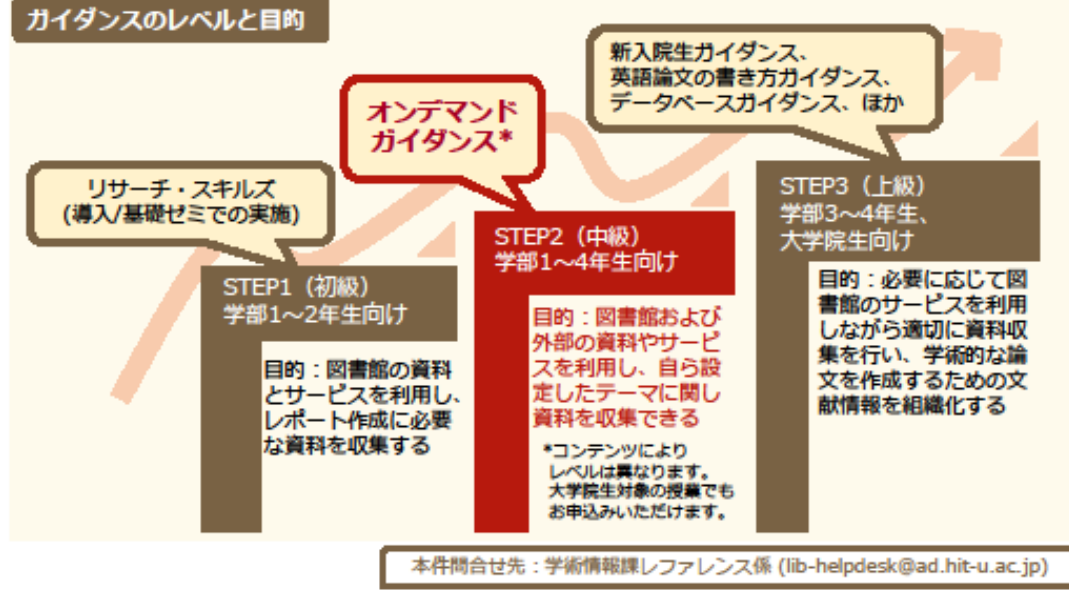


図5 オンデマンドガイダンス教員向けチラシ（表）

目的別コンテンツ紹介。
自由に組み合わせできます。

オンデマンドガイダンス コンテンツ一覧

1～2年生のうちから、ちゃんと本や論文を調べてレポートを書いてほしい！



図書・雑誌を探す
図書館資料検索のコツ

図書館を利用する
フロア案内＆便利なサービス

論文を探す
論文を検索・入手するには

図書館Webサービス活用
自宅から電子リソース活用

まずはここから！

英語論文や新聞記事も使いこなしてほしい！



新聞記事を探す
新聞DBや縮刷版を活用

一橋以外の資料を探す
他機関から資料を取寄せ

英語論文の検索と入手
文献情報DBを使いこなす

Google Scholarで探す
Google Scholarの便利な使い方

もっと詳しく！

卒業論文の準備や大学院ゼミで専門分野の情報を活用してほしい！



どの分野も

卒業論文を探す
先輩の卒論・修論を読むには

経済学分野

海外経済学文献を探す
経済学DBの便利な使い方

どの分野も

日本の統計を調べる
日本の統計書＆DB活用法

経営学分野

国内企業情報の調べ方
企業情報DBや参考図書を活用

法学分野

国内判例の調べ方
判例検索のコツ・DB活用法

どの分野も

海外の統計を調べる
世界の統計データの探し方

さらに専門的に！

お申込みは図書館Webフォームから *サンプルスライドも掲載しています

<https://www.lib.hit-u.ac.jp/retrieval/seminar/on-demand/>

一橋大学附属図書館
HITOTSUBASHI UNIVERSITY LIBRARY

図6 オンデマンドガイダンス教員向けチラシ（裏）

5. 明らかになったこと

これらの成果物を作って、改めて発見できたこともあった。まずは学部によって、同じようなガイダンスでも適切な位置が違ってくことから、ガイダンスも全く同じようにやるのではなく、学部の教えたことと合わせていく必要があるということである。例えば今回のカリキュラムマップ作成で、商学部は留学を特に重視していることが分かったので、留学予定者に向けたガイダンスを提案していけたらいいのではないかと考えている。法学部も、法学試験にあたって読む・書くことに苦手意識がある人へのサポートを重視していることが分かったので、法学ワークショップを続けることで貢献していきたい。

また「教えてもらえること」と「できるようになること」が今まであまり整理できていなかったが、整理した結果、「できるようになること」には能力とスキルがあることが分かった。ガイダンスで習得できることとして「能力」と「スキル」のどちらを目指していくのか、意識して内容を作っていきたい。

さらにカリキュラムマップや広報物を作る過程で、教員や同僚と話し合っただけで実感したのは、マップと広報物はコミュニケーションツールとしても有用だということである。マッピングについての教員へのインタビューで「こういうガイダンスがあったらいいのでは」と意見をもらったり、マッピングを一覧しながら同僚と「このあたりのガイダンスが手薄かもしれない」と確認しあったりすることができた。これからもマップや広報物を通じて教員や同僚とのコミュニケーションを取りながら、ガイダンスの拡充を図っていきたい。

6. 2021年度の図書館ガイダンスに向けて

来年度（2021年度）の図書館ガイダンスは、新型コロナウイルス感染拡大防止のためオンライン授業が普及したことを受けて、オンラインのコンテンツをより充実させる方針で情報リテラシー教育ワーキンググループが中心となり準備を進めている。オンラインガイダンス（ライブ配信または動画提供）は2020年度も行っていたが、2020年4月の緊急事態宣言下で手探りで開始する形となったため、教員や学生から見て分かりやすい発信ができたとは言えないという反省点があった。そこで情報リテラシー教育ワーキンググループで検討を重ね、2021年度は図書館のオンラインコンテンツを教員や学生にとってさらに身近なものとすることを目指すこととなった。

具体的には、まず新入生をターゲットとして、情報検索についての分かりやすい動画を新たに作成する予定である。数分程度のショート動画によって、新入生に図書館でできること

を知って興味を持ってもらうとともに、在学生も気軽に視聴して自習に役立ててもらったり、教員のオンライン授業で活用してもらったりすることを意図している。

オンラインガイダンスも引き続き実施するとともに、2020年度のアナケート結果等を踏まえて、教員や学生のニーズをより満たすように内容を改善していく予定である。こうした改善を通じて「図書館はオンラインでも色々やっている」という認識が教員や学生の間に広まっていくことが望まれる。筆者も情報リテラシー教育ワーキンググループの一員として、本研究で得られた知見を生かしながら、ガイダンスの内容および広報（誰に向けて、いつ、何を発信すべきか）の改善に貢献していきたい。

7. おわりに

本研究は千葉大学の「アカデミック・リンク教育・学修支援専門職養成履修証明プログラム」（ALPS 履修証明プログラム）の個人研究の成果です。プログラムを通じてご指導いただきました、千葉大学の國本千裕先生に心より感謝申し上げます。

[Report]

Curriculum-based mapping of library seminars: accomplishment report on ALPS Certificate Program

Terashima, Kumiko.

Reference Service Section, Academic Services Division, Department of Library Affairs, Hitotsubashi University

関連規則・規程

- 一橋大学附属図書館研究開発室規則

平成24年3月7日

規則第31号

改正 平成30年10月11日

(趣旨)

第1条 この規則は、一橋大学附属図書館規則（平成16年規則第178号）第5条第2項の規定に基づき、一橋大学附属図書館研究開発室（以下「研究開発室」という。）の組織及び業務等について必要な事項を定める。

(業務)

第2条 研究開発室は、次に掲げる業務を行う。

- 一 歴史的資料の保存及び公開に関する調査研究
- 二 附属図書館の情報発信の機能強化に関する調査研究
- 三 その他図書館機能の強化に関する調査研究

(組織)

第3条 研究開発室は、室長及び室員をもって組織する。

- 2 室長は、附属図書館長をもって充てる。
- 3 室長は、研究開発室の業務を掌理する。
- 4 室員は、本学教員の中から室長が指名し、その任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。
- 5 室員は、研究開発室の業務に従事する。

(室員以外の協力者)

第4条 室長は、研究開発室の業務を推進するため、一橋大学教職員又は学外の有識者に協力を依頼することができる。

(事務)

第5条 研究開発室の事務は、学術・図書部学術情報課が行う。

(雑則)

第6条 この規則に定めるもののほか、必要な事項は別に定める。

附 則

この規則は、平成24年4月1日から施行する。

附 則

- 1 この規則は、平成30年10月11日から施行する。
- 2 この規則の施行後最初に指名される室員の任期は、第3条第4項の規定にかかわらず、平成32年3月31日までとする。

● 一橋大学附属図書館研究開発室年報 編集規程

平成24年11月16日

附属図書館長決裁

(目的)

- 1 一橋大学附属図書館研究開発室年報（以下「本誌」という。）は、一橋大学附属図書館研究開発室（以下「研究開発室」という。）の年間の活動及び研究成果を公表することを主たる目的とし、併せて本学の図書館活動に関わる事業・調査・研究報告を掲載することとする。

(編集委員会)

- 2 編集委員会を研究開発室内に設置する。編集委員会は、研究開発室長、研究開発室専任室員、学術・図書部長及び学術・図書部学術情報課長から構成し、本誌編集に関する業務を管掌する。

(校正)

- 3 初校正及び再校正は、著者の責任で行う。

(著作権)

- 4 本誌に掲載された著作物の著作権は著者に帰属する。ただし著者は、本誌を印刷物として発行すること、電子化しインターネットを通じて公開することを許諾する。

● 一橋大学附属図書館研究開発室年報 投稿規程

平成24年11月16日

附属図書館長決裁

- 1 本誌の編集目的と合致する未発表原稿を、電子ファイルの状態で本学附属図書館研究開発室に投稿する。
- 2 受理する電子ファイルは、プレーンテキストないし Microsoft Word 形式に限る。
- 3 原稿には下記項目を記した投稿票を添付する。同票の形式は自由とし、電子メールで投稿する場合

はメール本文に記すのも可とする。原稿が論文の場合は (1)～(6)、報告の場合は (1)～(4) を必須記入事項とする。なお、共著の場合は、著者と所属の対応関係が分かるように記すこと。

(1) 原稿の種類：報告／論文

(2) タイトル（日本語、英語）

(3) 著者名（日本語表記、アルファベット表記）

(4) 所属（日本語、英語）

(5) 要旨（日本語で 250 字以内、およびその英訳）

(6) キーワード（5 点程度、日本語および英語）

4. 原稿は 1 段組みの横書きとし、1 頁あたり 40 文字、30 行で作成する。

5. 原稿は本文及び図表・図版、文末脚注を含め、20 頁以内とする。

6. 句読点は「、」「。」を使用し、英数字は半角、その他は全角で入力する。

7. 文献の書誌事項は、科学技術情報流通技術基準 SIST 02-2007「参照文献の書き方」に準拠する。

その他不明な点があれば、本誌編集委員会に照会する。

一橋大学附属図書館研究開発室年報 第9号 2021年
Annual Report of the Hitotsubashi University Library
Research Development Office. No. 9, 2021.

一橋大学附属図書館研究開発室
〒186-8602 東京都国立市中2-1

TEL: 042 580 8240

FAX: 042 580 8251

2021年3月31日発行